倭文麻環

五

140
6
223

倭文麻環卷之九

目次

栗野磨欲踊
正月十一日講大般若經
肝付伊地知反逆襲鹿兒島
蜻蛉群行幷鶴冲天
五月蠅沸騰
蓮鏡院白晝爲老狐被魅
蛇性深怨念

大正
10. 6. 2
購求

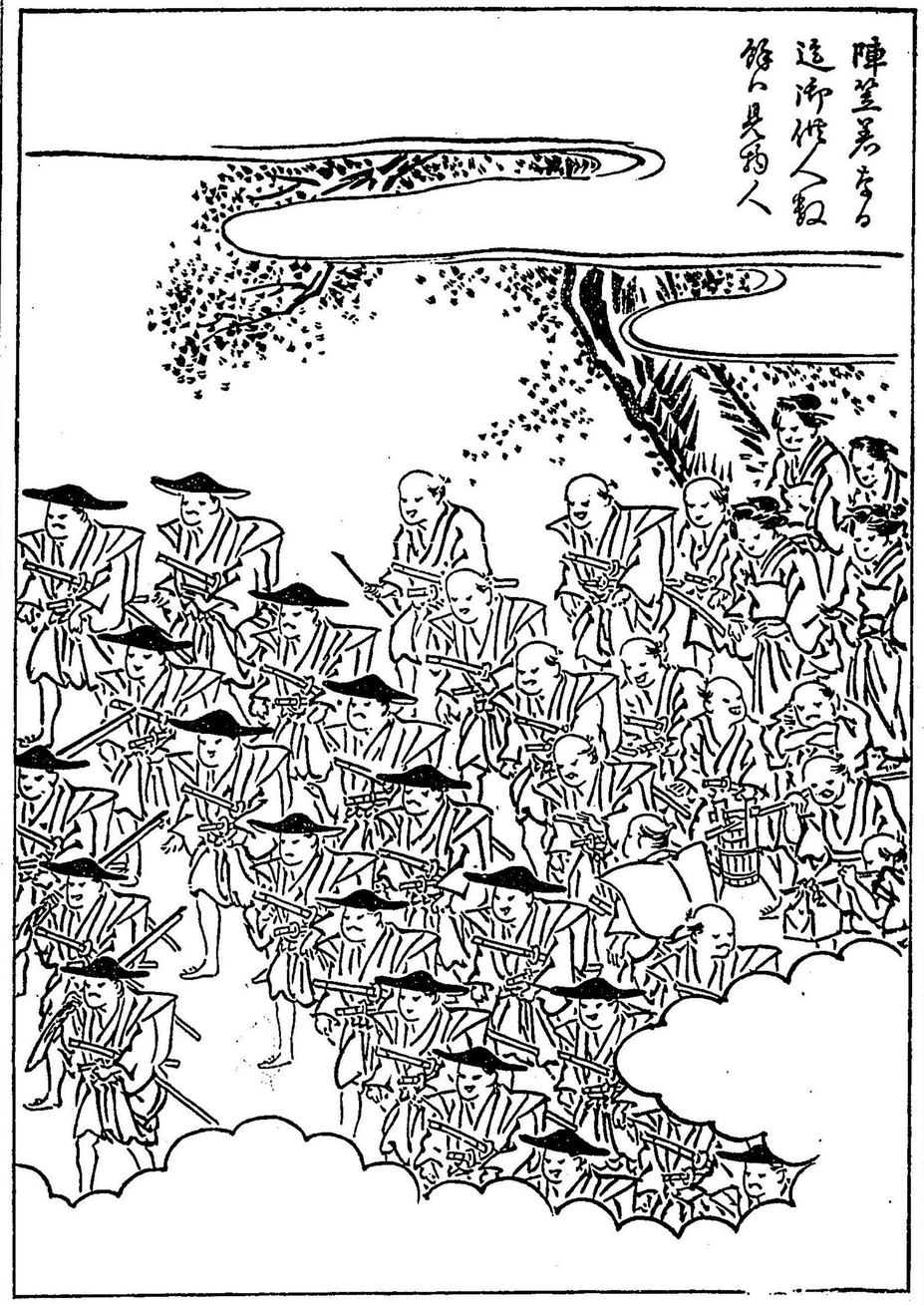
倭文麻環卷之九

栗野磨欲踊

關白羽柴秀吉公の行狀は皆天縱の才智後人力めて致すべからず夫れ朝鮮を討ちて　皇國の威稜を絶域に振はれしは誠に一世の雄にて器量の大いなるは漢高祖に勝れる事遠し世に不出非常の人必ず本生父の詳ならぬが多かるは其跡を神にせまく物せるもあり秀吉公も出生區々にして其父審ならずさるを武要拾最てふ書曰馬島明眼院は　後奈良天皇の時の醫師なり此天皇の御眼病を療治し速に平復し給ひしかば叡感の餘り宮女を明眼院に給はりそが名をも明眼と宣旨せられたり此宮女天子の幸を受けて懷胎なり然るに明眼は清僧の戒を守りて妻を有たず此宮女を尾州愛智郡中村の住人筑阿彌といふ知音に與ふ遂に筑阿彌方にて宮女の產みたる

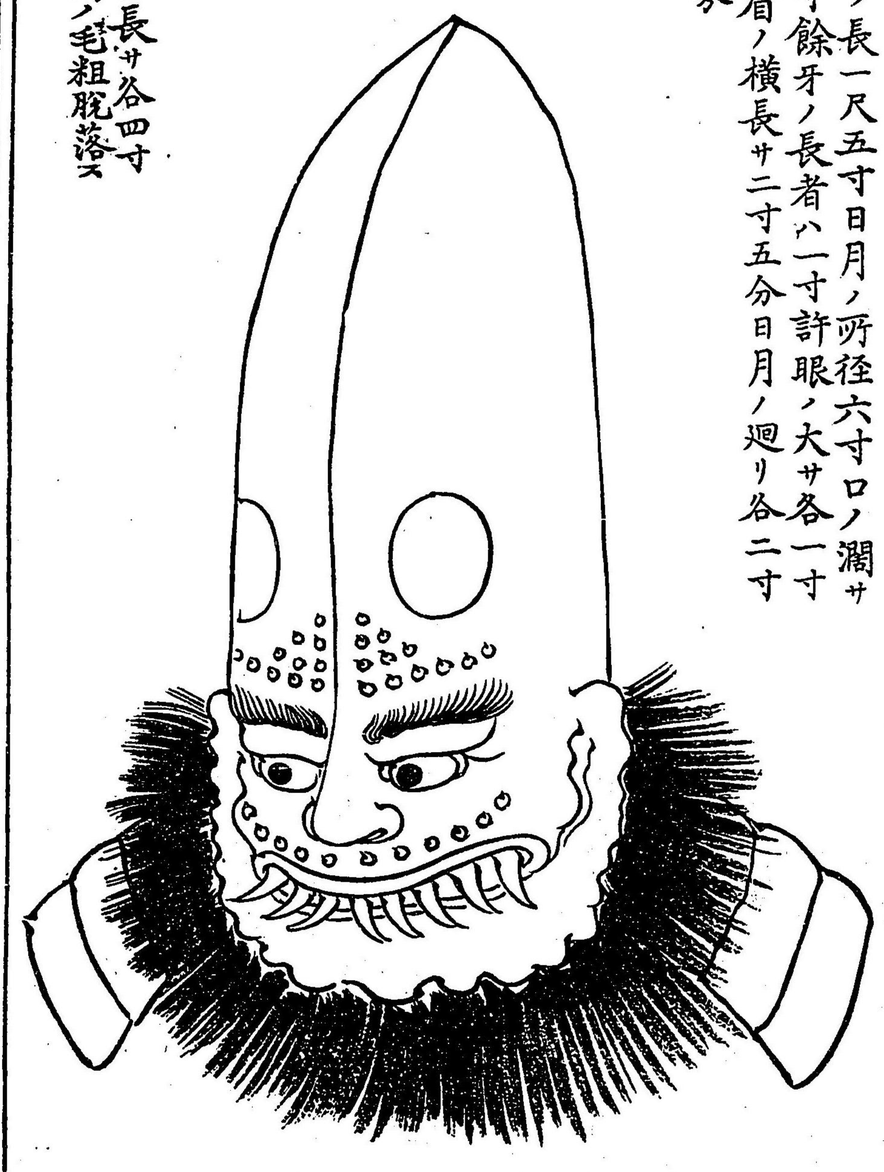
は即ち秀吉公なり故に世には王氏などゝ云ひふらせり一説には筑阿彌が妻懐中に日輪入ると夢見て孕み誕生ありし故童名を日吉丸と號すとあるも天子の御種を宿せし事を云ひなせるにや一説には織田信長の足輕木下彌助と云ものゝ子なりとあり然れども秀吉信長に仕へられし次第を見るに木下彌助を父とせば初めより織田氏の家臣なるべき事なり又秀吉治世の後父の廟とて中村になく又墓所もなし秀吉の父慥ならば屹度位牌も取立てらるべきに其事も聞えずいづれにも筑阿彌は實父にあらざりしをおのれも去り給ひしなるべしと見えたり秀吉既に六十州を嚢括して威風四海を偃すの餘り自ら明王ならん事を欲して忽朝鮮征伐をぞ企てられけることとし文祿元年壬辰　義弘公久保公は隅州栗野城に座在けるを秀吉公出て住名護屋躬行調度　義弘公御父子も速に御出陣あるべきよし軍令を傳へられける程に兩君は二月二十八日栗野城を首途ましゝ拷衾新羅國へぞ御進發あるそもゝ新羅國はむかし神功皇后の御時攻めて御征伐ありし其時皇后は固より婦人の身にして異國を征伐せんに新羅の狄ども大將は女人なりと見侮らんは口惜かるべしとて棟梁の臣武内宿禰をして鬼面の御冑を製しめて狄どもを怖れさせ給ひ御供奉の從軍も皆鬼頭猊首の冑頰當を戴き被りたれば新羅の狄どもを初としそれが乘つたる馬共迄恐騒ぎつゝ一支も支へず降參して永く西藩の臣と稱し年々に八十艘の貢物を上りけるさればその軍の次第著したる魏志にも神功皇后の御事を以て鬼道迷衆などゝも記し置けらし皇后の召されし御冑とて今も豊後の英彦山に奉藏せしを見るに大なる立烏帽子に鬼の面を製り込められたり去ればぞ踊などに

陣笠著たる
這御供人數
餘ハ具足人



盃ノ長一尺五寸日月ノ所径六寸口ノ濶サ
五寸餘牙ノ長者八一寸許眼ノ大サ各一寸
圓眉ノ横長サ二寸五分日月ノ廻リ各二寸
八分

鍛ノ長サ各四寸
右同ノ毛粗脱落ス



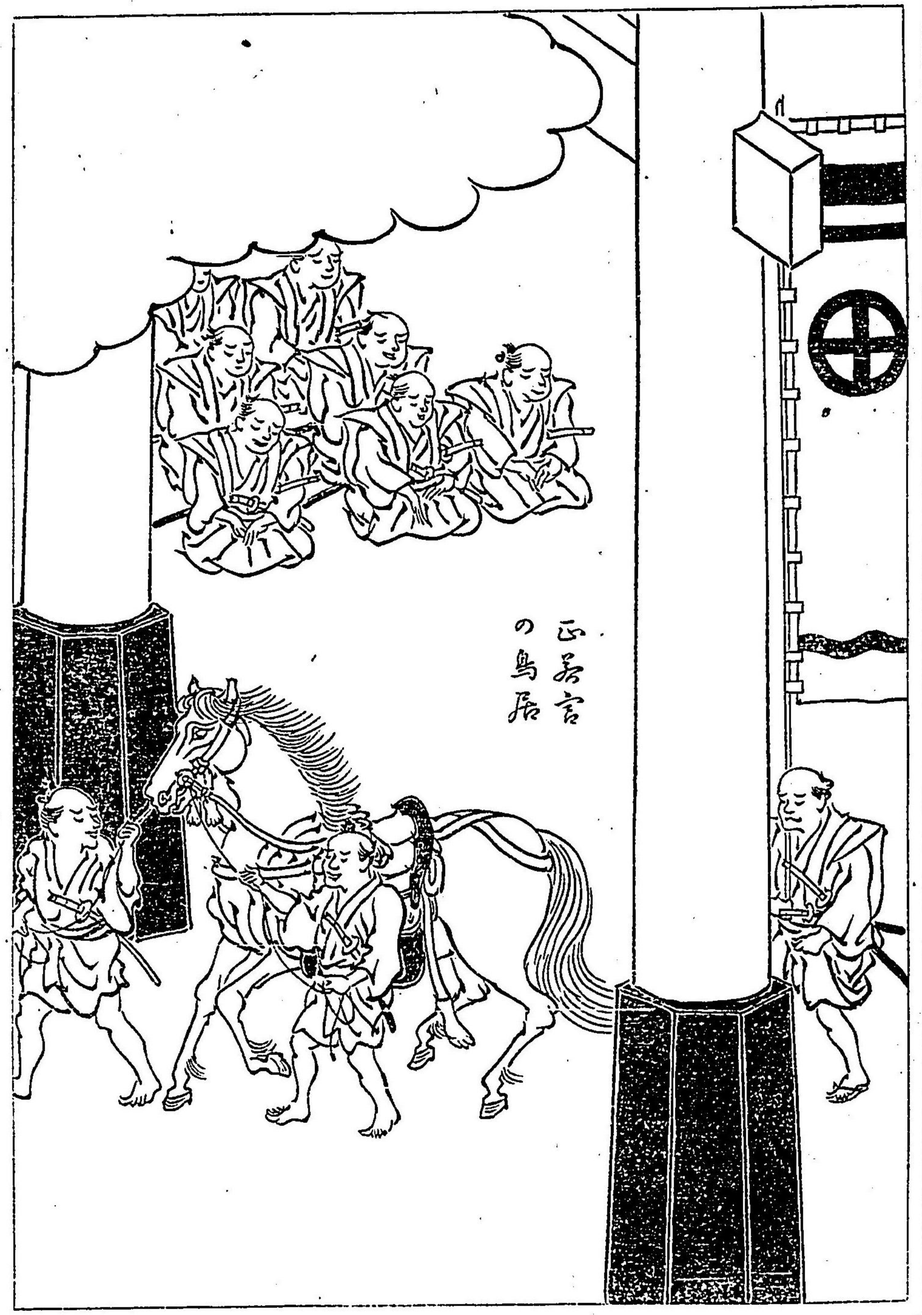
前導せる者の鬼面被れるを呼て先鬼など稱へるも古き世の遺風にや出でけん皇后の叡慮を回らされし妙計こそいみじく勝れ侍りけれ是より皇國の甲冑は外國の製作に異なるとぞ申ける此事いかにやと半は疑居しに秀吉公朝鮮を伐ち給ひし軍の事を明人記したる書に倭衆多戴鬼頭獅面官馬見之驚退と書けり是にて正しく我國の甲冑はおのづから西方の製に勝れる事を信じたり是全く武内宿禰皇后の勅を受けて作り初めたる神武妙策我人仰いて其遺德を貴ぶべし去る程に　義弘公御父子御出陣の勢を催されけれ共栗野に有合ふ御供の人々とては僅二十三騎ぞ揃ひける夢にだに見ぬ西土に御出馬ましまずに二十三騎のみぞ揃ひつる御心細さも想ひやるべし況や比年以來　龍伯公を始め奉り數多の人々上京の御費用打續き上方の御借財過分に及びしうへこのたび

義弘公征韓の役に赴かせ給ふには京都の御舊債を償ひ給はざれば唐入の御支度も調ひ難く人々も出陣の用意に事を缺きたる折節なれば云袷云恰一方ならず御心を苦め給ひけん御事どもは筆にも詞にも述べがたし加之久保君の御夫人達を始め早々人質として上洛あるべし　龍伯公も急ぎ名護屋へ御到着なさるべきよし引きも切らざる秀吉よりの催促最中にて上を下へと諸人片づを飲て安き心ぞなかりけるまして神功皇后の時は新羅國近き隣國をこそ征し給ふなれ此度は音にのみ聞く遠き唐土迄伐給ふ事なれば誰かは一人生て再び歸るべしとおもふべきけふを限りの軍の出立親兄弟妻子にもこの世に長き訣の名殘いふも更なるべし去れば義弘公の朝鮮より御夫人宰相君へまゐらせ給ふ御文に我等が儀は不及申子供の爲に候間夫々の覺悟故あしをたて候は

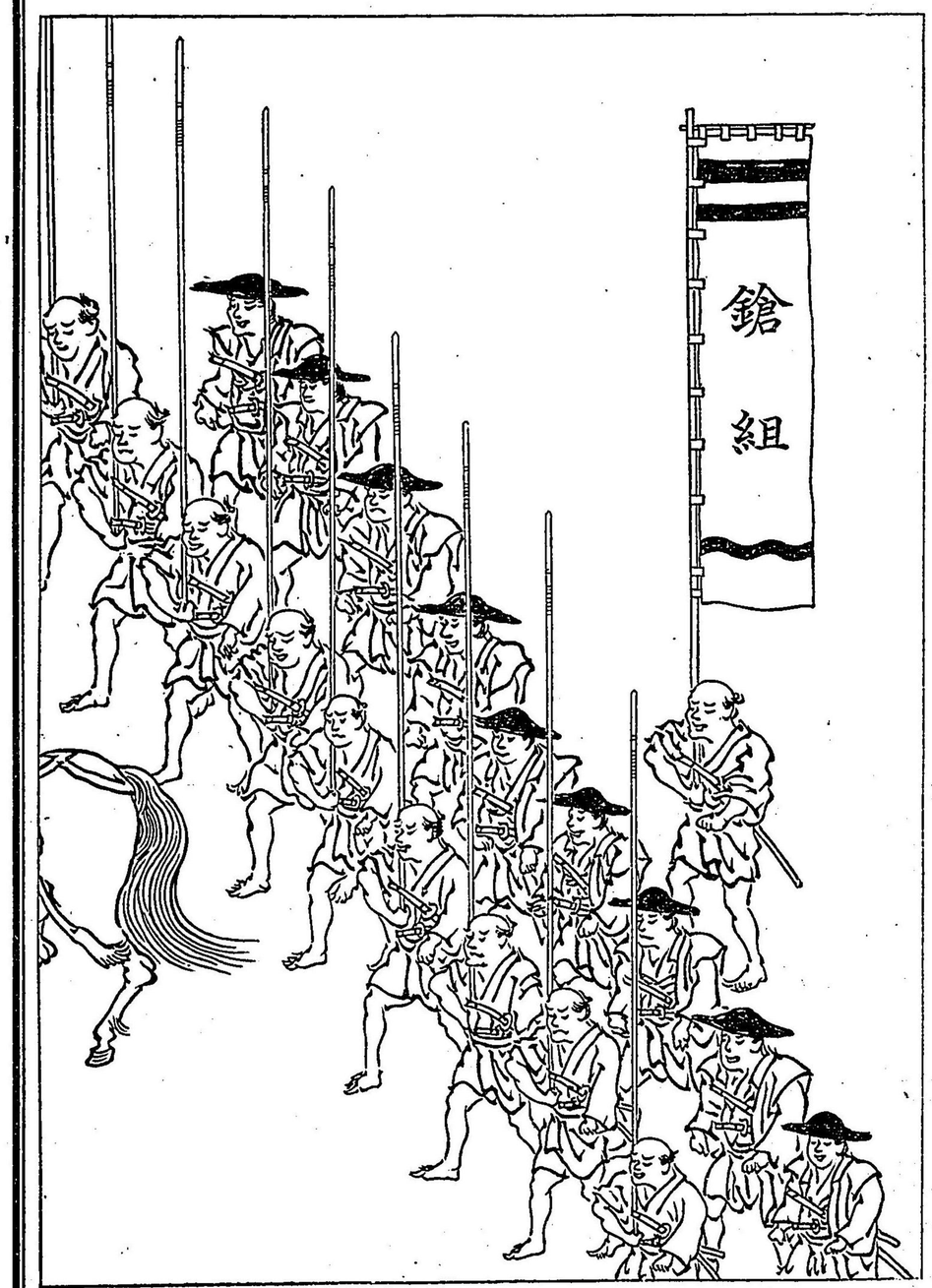
御草履取ハ皆りこうりまを
ふり後ハ山駕籠の中まを草履を上ら
ハを取て御駕籠の中まハ御具
足を置く山駕廻り御庭
定人数大抵弟の如く山駕
既ま見ゆる時ハ又掛の人くハ知を
待ち〳〵てひ〳〵と扱伏を誠まめ社
の謡を尽〳〵ま天の雲赫ふかと
しそ尽まふり照照〳〵
終わうかし〳〵と云

毎年七月四日を
ゆく無りた

鞍金馬一組くゝ
帝く蓋一主將の騎
馬之事


正殿言
の鳥居

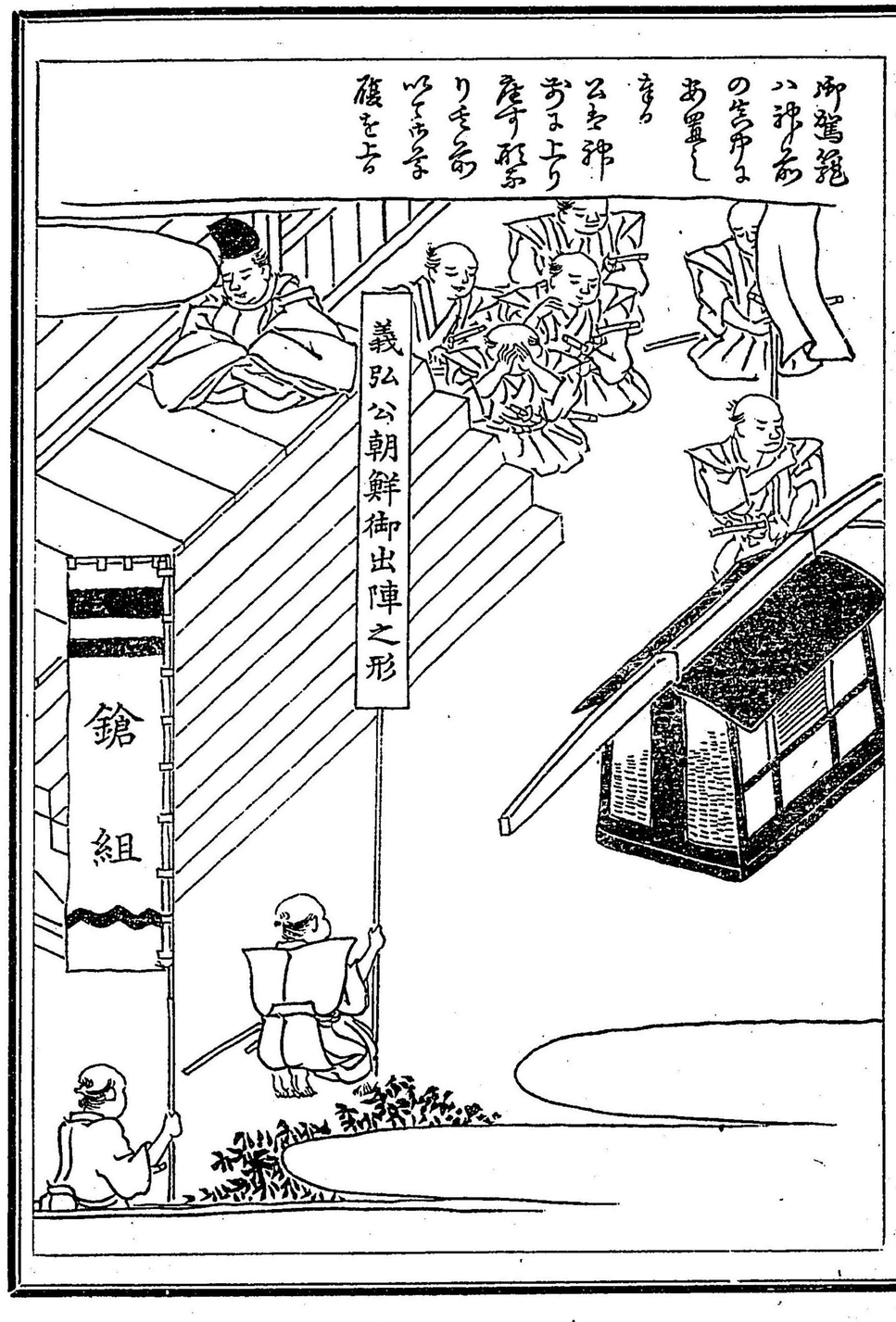
弓組


鎗組

先後の鉄炮組踏留り神廟の方を避けて山手の方へ回りおつ弾絶めん吉鉄炮を打乱れ青山出陣の姿形なり

公諱の高札の表ゝは茅ひゝ
又一郎様と書をり

踊の惣人数弥増よひ〜と打殺寂然として一言を出さるものなし時よ云御出陣の次第を語るを聞きて見物さ事りなひ〜その丑男女老人心感涙戦流さと云ものなし


御駕籠八神の前の先陣はあ置しなり
公も神おは上り座す所りを前ひとつなる旗を上る
義弘公朝鮮御出陣之形
錦組

西岳八幡宮先陣
國分八幡の支廣あり

一
二
三

四
五
六

おひてくれ
あっまらき
ちんけき
べいうち
情あかけん
四
男道ゴロ
人をはこうひの
身ぢう極ちる
三

一
おミたちや
てん
べべん
二
いきゝ
身ちれい
どう

一
二
三

四
五
六

磨欲踊第四番
名刀を抜けらん武を舞う
き兵を嘶て鋪手の
うぬら為よあの刀抜を
きしめられ空ちつ

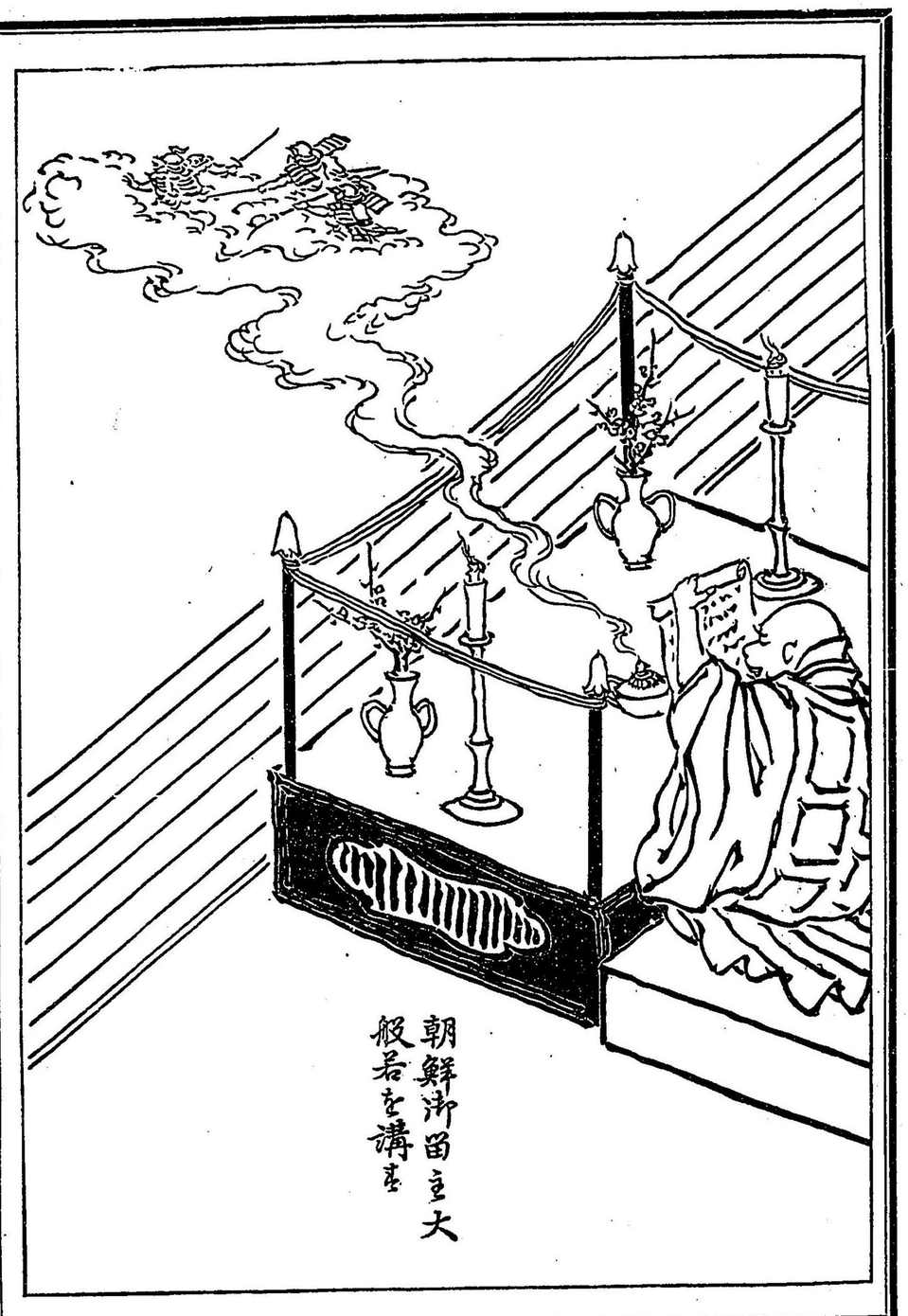
まいたん
思ひ
さび刀
三
さび刀
二
伯耆の
ひきたやけあ
一

ぬ様に候はゞ我等が無き跡にたとひ一萬部の經をよみて手向け候はんよりもうれしかるべしと遊ばされたりやつこ（國柱）自ら云事がたぐひまでも此御文の詞をよみ候ひては坐（ゾロ）に涙ぐむ計りに感悅今更に限なし　公の御齡も六十餘りに及び玉ひてさてその御文書きてかへし贈られけん御心の中こそ返すぐもいとほしと申も愚かなれ況や當時の御夫人姫君を始め奉り跡に殘り留まる人々は新田霧島正八幡などの大社明神は申すにや及ぶ祈願所の佛寺にも我君の千世ませと御武運を祝（ホギ）奉り願文を捧げられて戰場の御勝利を祈られずと云事なし（此時の御願文大社に今も猶殘りける）　然るに君固より海内の英寛猛を節にして數々戰場に臨み軍事を曉暢して天下の人情に通（ツウ）達し給へば大敵を見て畏れ給はず小敵とて侮り給はず今日栗野の宗廟正若八幡宮にて啓行の御儀式を　行はせ給ひ爰に候ひける輩に磨欲踊を興行して諸軍の心を奬（ススム）しめ名殘を惜み奉る人々を慰め玉ひけり折しも如月の空さえ返りて深雪の降り積りければ野も山も皆白たへに成りにけりこよひの宿はかち栗野里と即興を詠じ給ひける此一首の御歌に諸人一入の鋭氣を起し勇み進んで御出陣の御供し三月上旬には大口を御進發ありて肥前唐津にぞ押渡りける

正月十一日講（ズ）大般若經，

島津左兵衛尉尚久は　大中公の舍弟にて天文八年九才の時既に　公に從軍して市來城攻めに初陣せし人なり尚久の子を圖書頭忠長入道紹益と稱す成童の砌より自他國の戰場に軍だちして野戰の功拔城の績普天の下に知らざる者なし就中文祿二年より朝鮮國に渡楫して慶長三年十月朔日泗川大捷の時臣下の軍忠は此忠長をもて第一とすされば同年十二

月　義弘公御歸朝ましまして筑前博多津に御着船ありければ本朝の諸將何れも御迎勞なし奉つられ泗川の大捷に賴つて日本人命を全して歸朝する事を得たりとてとり〳〵感歎せられける　義弘公泗川の軍功は從弟島津忠長が働第一に候なりと宣ひける此故に其座に在合ふ淺野彈正少弼長政扨て〳〵兼て忠長の高名を承り及びしに果して殊功を絶域に立てられ名譽を三國に播れたりと忠長の手を執て靈假れしとぞ去れば中納言樣も忠長の勳功を御賞美ありて前後一萬三千石の領地をば給はりてけりかく忠長忠信久元とて父子三人朝鮮七ヶ年の在陣なれば故郷に殘り留まる人々とては女童のみにてあしたゆべに父子の延命息災をのみ神佛に祈誓の外他事なく忠長の第宅には大乘院盛久法印安養院賴眞僧正とてその頃博識德達の名衲を招延し唐の玄奘三藏が太宗の勅を奉じて飜譯したる大般若經を轉讀し拂千凶於萬里外施百福於一天内と大音聲を揚げて調伏の秘法を修したれば見聞の男女身の毛四竪てぞ覺えける既に十月朔日はこの滿願の期日とぞ聞得たる去る程に朝鮮の大捷異國本朝に露顯して慶長四年正月十一日諸願成就の大般若を講ぜられしより今に至て數百年此日金城にては虎の間に於て舊例の講讀を修行なさしめらる抑此事本は島津久元の嫡子圖書頭久通の宅にて修行なりしを久通御家老職にて毎年正月十一日には休暇を乞はれけるある年　寛陽院樣圖書は正月十一日の祝に限り私の暇を乞ふ事何故ぞ御舘の具足の御祝をこそ專には候ふべきにとの御沙汰なり因て翌十二日同職の人よりきのふはかく〳〵の御沙汰に候何とてきのふはいつも御暇をなさるゝぞと問はれければ久通さん候毎年正月十一日



朝鮮御留主大
般若壽講

には亡祖父等朝鮮在陣の留守に於て私宅大乘院安養院の住持を始めあまたの衆僧を招延し朝鮮へ御在陣被遊候　義弘公家久公を始め奉り御上の御武運を祈奉り次に先祖共の息災を祈禱致せしに七ヶ年の御在陣君臣恙なく御安泰のみならず泗川の大勝利天下に比類なき御名譽を揚させられ明韓人は十萬餘騎も塵し給ひしかども御方には只一人のみ戰死仕候事和漢に例なく古今に未承り及ばざる御武運を開かせられ剩へ神狐地に走り靈鳶天に翔り候ひしは全く神明佛陀の冥助とも申べし因是薩隅一圓の御領地に定まりて今に至て其賜ものを辱うする事にて候へば吾子孫までも此大般若轉讀を修行仕りて昔時の遺澤を永世に忘れざらしめん爲と存候ひて御上の御祝日ながら休暇を申給はり私宅の修法を專と仕候也と談話致されけるかゝりければ此由を同僚より

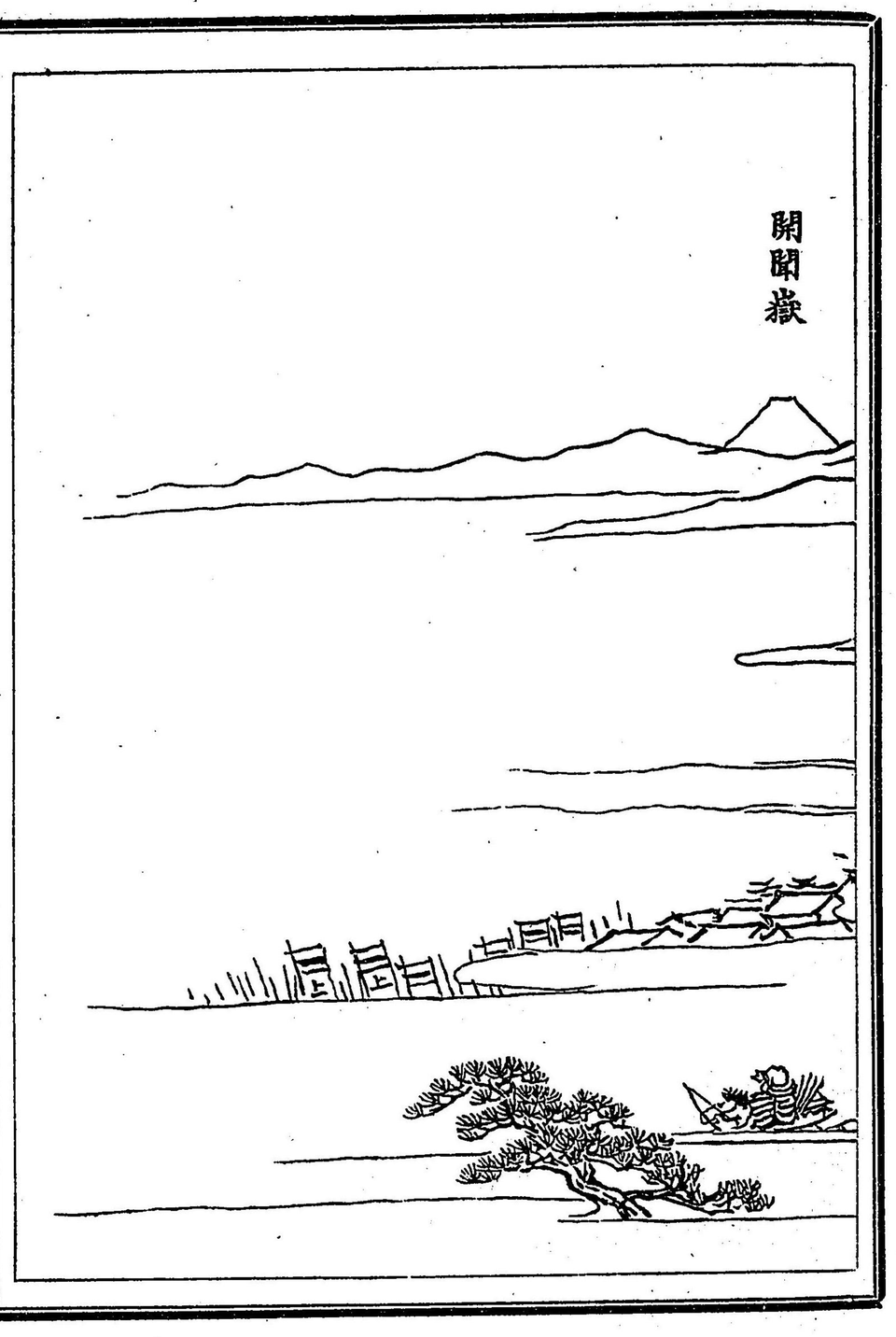
言上あり公聞し召してさて〳〵左樣なる結構の由緒にて有るよな予は却て是を知らざりきされば久通が宅のみ修行すべき事ならずとて是より毎年正月十一日は虎の間に於てこの御修法行はせられける去る程に御物濟みてより差次に宮の城邸にて舊例の大般若をば當今までも修せられしとぞ聞えたる伊集院莊嚴寺には朝鮮國に持渡られたる護摩壇今に現存なれば當時の勢かく有るべしとぞおもはれぬる又朝鮮歸陣以來白狐に駿狐二疋宮の城屋敷に住居して今も猶其玄關の下に巣作りて稀々には主人を始め邸内の者共は此兩狐を見るとなり然れども是昔より宮の城屋敷の擁護とて男女ともに異ともおもはず朝鮮陣以來の事故朝鮮狐と呼なすといへり（追考加治木日々記に慶長中正月十一日於加治木大般若經を誦讀せられし事見えたればこの日此講讀を修せしめ給ふ事は本よりは公の舊例なるべし然らば宮の城邸よりはじまるにはあらざりけり）

肝屬伊地知反逆襲鹿兒島

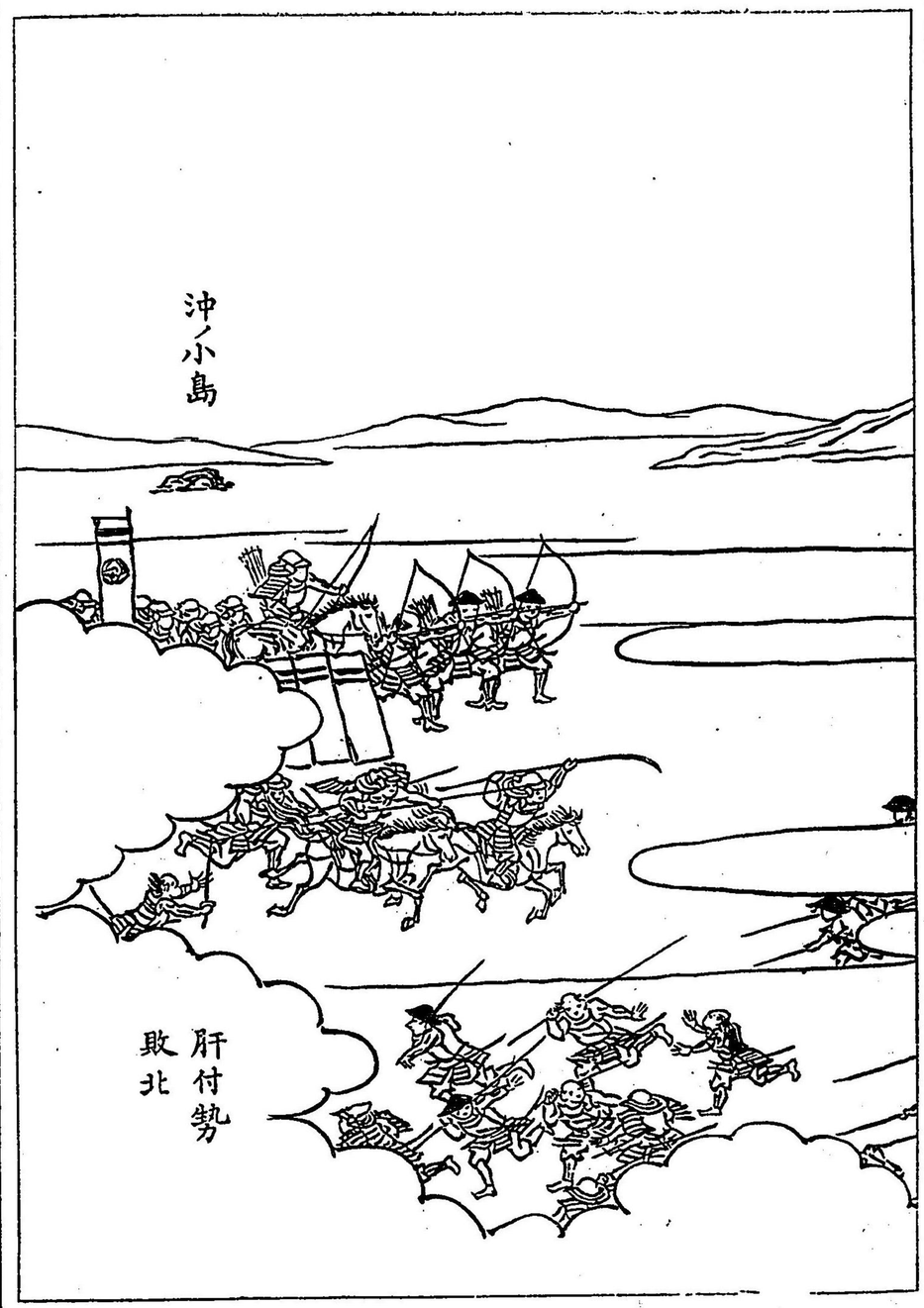
鹿兒島諏訪廟七月の神事に左右頭殿の警固として府城の士林田祿百石以上より長柄鎗持一人づゝを出すこれをば俗に七月諏訪祭の時肝付勢寄せ來る故防戰せしよりの故事といひ傳ふ按ずるに天文元年七月肝付が兵垂水の早崎の營を襲ひし事をいふなるべし其軍の次第は牛根軍記三國軍記てふ册子に見えたれば左に鈔錄す爰に伊地知周防重興といふ者あり其先祖を尋ぬれば北條泰時が右筆因幡房尊西といひし者の孫三郎兼季が三男刑部左衞門季清が子伊地知彈正忠季隨が九代の孫なり後に秩父と改號してみづから畠山二郎重忠が嫡流なりと稱すれども後世の妄作にしてあるにもあらぬ事どもその系譜に書き載せたり彈正季隨は朝敵となりて尊氏將軍の時獄舍に繫がれけるを　貞久公の御取成にて其罪を宥められ始めて本藩に仕へけり又肝付河內守兼續入道省釣といふ者あり自からは大友天皇の皇子余那足王の時內大臣賜伴姓と記したれども大友の御子に賜伴氏人なしこれ桓武記に延曆十四年五月配流囚大伴部阿氏良等妻子親族六十餘人於日向國と見えたるぞ伴姓の者日向國に來りし始なる肝付の系譜に善名善男と云者を系たり此二人は三代實錄に見えて是又皇別に非ざればかの伴阿氏良が六十餘人の者日向國に流されてより子孫日向志布志の邊を主張居たるが大友帝の遠孫と取合て伴姓とはなりしならん剩へ省釣は肝屬郡一圓を知行し　日新君の御聟となりしかば公室には服事して忠を存すべく又伊地知季興は其先貞久公の鴻恩を被り下大隅五ヶ所の地をも給はりてければ彌奉公の臣節を抽んづべきに肝付省釣に與黨するのみならず日向都於郡の伊

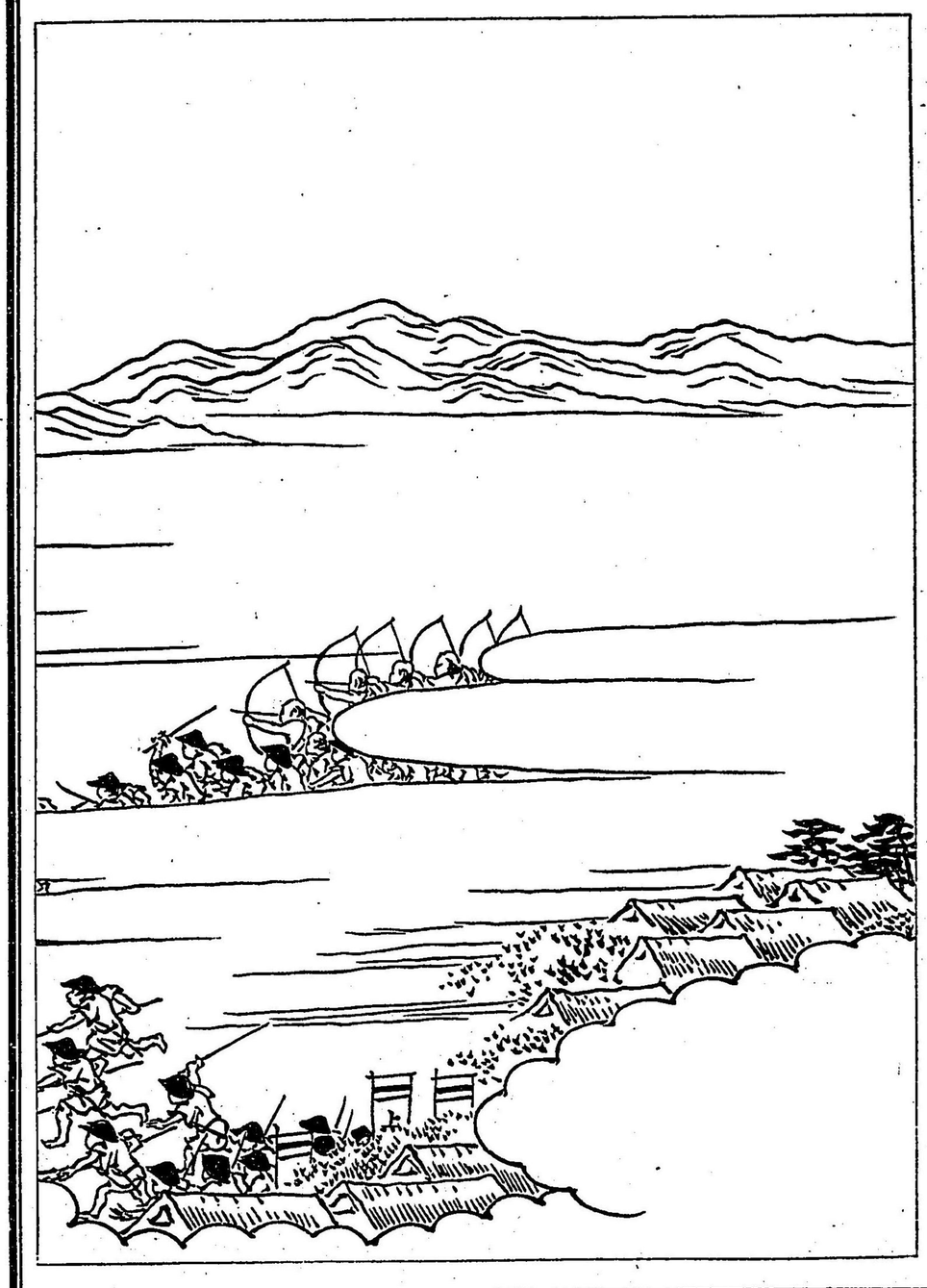
櫻島
横山の城
東福寺城
鳶石
精木川

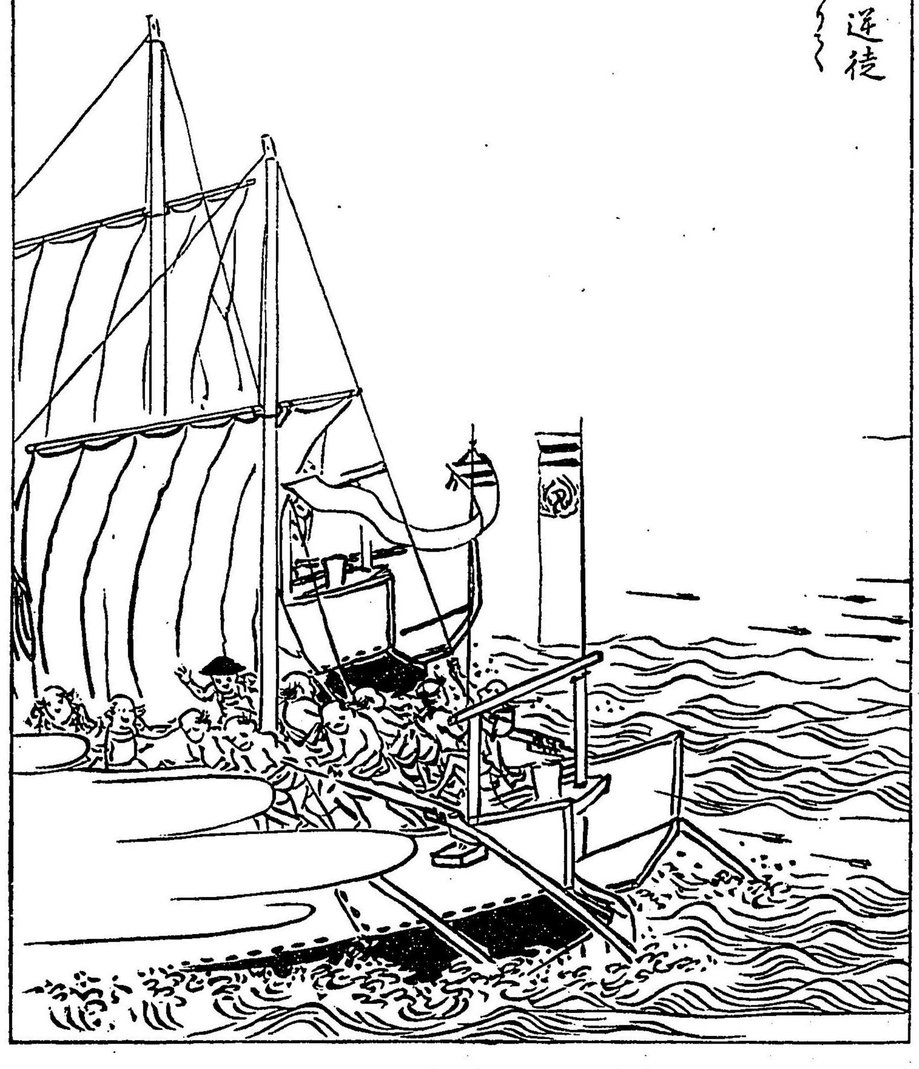
高隈嶽
烏ヶ嶋


開聞嶽

松原洲崎
本御内城


沖ノ小島
肝付勢敗北





肝付伊地知の逆徒
鹿兒島へ押渡る
狼藉を

洲崎

御方の兵船肝付
伊地知の勢を防
く

東家に内通し御家を奪はんと企みけるこそ不敵なれ時に天正元年癸酉七月二十四日肝付省釣が兵と合體して既に三百餘艘軍艦を艤ひし大隅櫻島を乘取り鹿兒島に攻入んと寄せ來る由早馬を以て注進あれば　義久公の舍弟島津中務大輔家久を初め精兵の手垂五百餘騎を拔て横山赤水野尻三ヶ所に走せ籠り今や遲しと待居たり如按敵船一齊に漕來りしが何とかは思ひけん櫻島を漕通り直に鹿兒島に寄せ來る鹿兒島の軍兵兼て用意したる事故即時に濱表に駈出で備を立て待掛けたれば爰にも船を着け得ずして漕戻さんとする處を伊集院善左衞門と云者町中の歩卒を引率して兵船に取乘り惡し返せと漕掛ける是を見て敵船取て返し互に鐵炮の筒先を揃へ鯨波を作り揚げ百千の雷の鳴り轟くが如く透間もなく射たりける善左衞門は楯の面に顯はれ出で御方を下知して立たりけるに敵の射る矢に眞中を貫かれし其矢を射返さんとはせしかども痛手なれば船底にかつばと伏して死たりける敵船には是を見て舷を敲き射たり〳〵と呼はりける是を始めに敵味方の兵船一度に漕寄せ入違ひ喚き叫んで攻戰ふ胄の星は虛空に輝き刄の影は海底に映り血は流れて滄海を染め屍は積んで筏をなす鹿兒島の軍勢は追々に續き來りて人數打重なれば敵は堪へず大崎鼻差して引退く折節帖佐の軍兵鹿兒島勢に加はらんと兵船に取乘り鹿兒島の如く來りけるが遙に敵の漕返るを見て餘すな洩すな擊取れと瀧が水に船を止め備を成して待掛けたり敵船是を見るといへども僅の小勢と見侮り何程の事か有るべきぞ只踏潰して通らんと船を押寄せ我先にと陸へ上らんとする處を帖佐の城主平田新三郎内藤九郎を先とし南雲壹岐同新四郎勝目與次郎

彼是五十餘人矢衾を作つて散々に射る中にも指宿四郎次郎といふもの小高き所に馳上り敵を目の下に見下し眞先に進むだる武者七百騎射て落し矢種盡きたれば打物を拔て切て掛る其外餘多の勇士續きて打て出で火花を散らして切崩す此時敵は磯涯に在り海を後に備を立て帖佐の勢は後に高山を當てたれば互に引退くに路なく相掛りに懸りて攻戰ふ爰にて敵兵數多矢庭に打たれ又半は海水に追はめられ叶はじとや思ひけん手負を扶け船に取乘り沖中に控へたる後詰の船と一ッに成て櫻島の内瀬戸村の如く漕退く折しも中務太輔家久藤野村に居られしがこの有樣を見るより早く敵は瀬戸村に退くと見えたるぞ急きて瀬戸村に走續き力を添へよと采幣を振て下知をなせば早雄の若者共承り候と其間三里が難所を飛ぶが如くに走せ續き瀬戸の御方に加はりて今や今やと待居たり敵船も是をば悟りけん瀬戸の方を遠ざかり向ふの山涯を櫓脚を早めて漕通らんとする處を家久の手の者ども得たりやおふと鐵炮を雨の降るが如くに打ちかくる敵は彌船を早め下大隅輕狹といへる處迄這々の體にてぞ逃入りたる然ればかの重興は御家譜代の被官として肝付方に與みし叛逆を企つるの條奇怪の至り也此序を以て根葉を絶して後昆の禍を除かるべしと衆議一決し頃は天正元年癸酉九月二十六日の夜半に艤ひし同二十七日の曉天に早崎垂水といへる所に着岸あり且らく爰に陣を搆へ直に軍を進め早崎の城を取卷て鬨の聲をぞ揚げたりける城中よりも吐氣を合せて志ばしが程は戰ひしが小勢を侮り城中鳴りを靜めて櫓の上より遠矢ばかりを射掛けつゝ墓々敷事はなかりけり斯かりける處に鹿兒島より漸々加勢の兵馳來りければ城中俄

に騒ぎ立て兎角すれども手配定らずと見すましければ唯一攻に攻めよとて鹿兒島の軍兵早や切岸の涯まで攻寄る城兵爰を破られじと矢先を揃へ射たりける是にも尙辟易せず既に塀涯に攻近づき衝出す鎗を奪ひ取り射矢を袖に受留め半時計り戰へば敵の方に討たるゝ者百餘人寄手の内にも肥後平三郎桑波田孫太郎河野玄蕃討死す伊集院源助なる者は深手を被り臥しけるを郎等走續きて肩に掛け味方の陣に引退く本より大勢の籠城ならねば餘多の勢を討れなじかは以て叶ふべき其夜の子の刻計りに城の大將伊地知美作守を始め密に城を落行きける中務太輔家久城中に入替り法度を定め守衛の武士を籠置き是より直に牛根の城を攻んとて二手に分れて犇々と押寄せ矢合せの鏑矢をも射す透間もなく攻めたりけりされども案内者ども籠りたれば輙く落つべしとは見得ざりけり去れども寄手は屈竟の者ども膚撓ず目眩ず一向に攻めたりける城中の者共は肝付と連謀して樣々に手立を替て防ぎけり斯かりければ流石の寄手も退屈し兵粮の運送も覺束なく殊に諏方の神事行はるべき期なれば一先戰ひを止められ時節を以て攻給ふべしと中務太輔家久敵を押へて殘り留まり諸軍は各鹿兒島へ開陣ありと云々陷すべき敵陣を開きて諏方神事の爲とて歸陣ありといへば當時諏方神事は鹿兒島一統の祭禮にておびたゞしかりし事はさらるべしさらば頭殿千本鎗といふものの肝付勢鹿兒島を襲ひしより始まれりといふ此前後の時より權輿せし事なるべし

蜻蛉群行拌鶴冲天

江戸の芝の御館養正舍に祗役せし頃は享和元年辛酉の秋九月二十四日の申の刻許の事なり秋津虫南と西との間より東

北に向ひて飛行く事引もきらず其高きも望火樓よりまだ上をば列をなして幾千萬といふ數も知らず翔りゆく何れの何所にかおのが棲かありとも知らず又いづれの地よりしてけふしも飛立ちけん秋の日まだ長きに飢もやらぬもあやし又こよひの泊は何處ならん目の屆く程は見やりたれど雲の中に消えゆき侍りぬその列を亂さぬも雁がねの飛ぶに異ならず小蟻の群りて戸渡り往來が如く其中にも飛行がてら跡へも側へも立戻り吟ふありしが頓て友にさそはれて只東北とのみ飛行きける此物むかしより名におふ虫にて秋の時殊に多く出ぬれば秋津むしと稱へけるとかや小泊瀬の幼武の天皇の御獵の時御臂に虻てふ虫の咬付ける時このもの忽ちに飛來りて其虻をくはへて去ければ　天皇めで玉ひて大御歌によませ給ひつ其地を秋津野と名を負せられ玉へりかゝるためしさへある虫なるがその蟬のうす葉のいと輕げに異やうに四のつばさ又おもしろし花の色みちらぬにはあらでうたてその去べの汁を吮て踏みちらすわざもなくそこらとびありくいとにくげなし子どもの網してとらへなんとさわぐも亦興あるべし雄畧紀云、天皇獵于大和小野、時虻嗜天皇臂、有蜻蛉、飛來齧其臂將去、天皇口號曰、云々名其地曰蜻蛉野（戰國策云、王獨不見夫蜻蛉乎、六足四翼、飛翔乎天地之間、俛啄蚊虻而食之、仰承甘露飲之、）さてその虻蚊を食ふはその性なり雄略の御臂にかみ付ける虻を捕去りしは邂逅の事なれば天皇もこれを褒め玉へるなり關東の地は時ふしに蜻蛉の群だちて翔り飛ぶ事あり何故をしらず又桃花鳥（一名朱鷺）も鴻雁の如く行をなして飛びぬる事我藩には見ざる處なりされば蜻蛉などはいと脆き虫なるにかく秋に至り寒き方の東北に飛行き明くる秋の頃には又南の地に翔り來ること其

享和辛酉の秋九月廿四日
蜻蛉群飛しく来れる図
吉

新古帖
阿弥陀ヶ山おろし
鳴く夕暮り なき
鈴虫さる 新の
うたふ

理未だ思ひたらず是に因て本藩の田布施は三代實錄に多夫施と見えたる地にて此田面には田鶴多く降たつ抑鶴の澤にをるは筑の前後州なりそが幾百千疋ともなく川の洲に伉儷居亂さずして立てるを見れば關々雎鳩在河之洲とは正しく鶴にやあらんと思はる偖て我藩の田布施は東に金峯山とて三尖の高山あり山上の藏王權現は安閑天皇を祠り奉る大和國金峯山と同體なり因てかれのみたけと唱へり夫木集顯昭歌に「朝もよひ紀の川上を見渡せばかれのみたけに雪ふりにけり」此御社に　日新君の御父祈請を凝らし給ふ事三年一日白衣の祝子六人忽ち來りて告て曰汝當に文武達道の男子を生むべしと云て化去りつ又御母は金峯山を伏拜み給ふに白飯變じて懷に入ると夢み給ひ幾程なく御妊身とならせられて君を御誕生あり幼名を菊三郎と申奉り長なり給ひ眼は明鏡を掛け鬢は櫻櫚の毛を散せるがごとくおのづから智仁勇兼れ備はりまし〳〵たるが深くこの金峯山の大神を崇敬遊ばされ神の靈應を得給ひて始終の御軍にも勝利を得られしのみならず御子御孫達に至る迄世に比類なき賢主をうまし給ひしかば國の濁亂を立所に平定し給ひ永く社稷の基を啓きて枕を泰山の安きに置かしめられし事偏に君の御子孫をして訓導の德澤隆厚なる所とぞ聞えぬるさてこの麓の田面に降たつ鶴は秋八月中旬過にして明くる春三月に飛立んとしては豫め先づ青麥田芹を求り食て其體を輕くしそして二十日前より互に唱啼あひておのが雄とり雌とりの匹をそろへ或は各々が友だちの伴を待そろへつゝ一所に飛立てるに若しその雄に別れ其の友に離れたるは只ひとりのみ悲鳴して飛びもあがらず跡に殘れるいとあはれにて唐の杜子美が

阿多郡田布施
金峯山より春
日向鶴群行し
て雲中に冲る

詩に沙頭暮黄鶴失侶又哀號と作りけんもおもひやられたり凡そ鶴の春に至り跡に殘りしもの又くる年の巣を作る者ともいふ其一所に飛立つ時必ず此金峯山の上を二三廻り翔りおのが偶匹々々に伍列をなして目も遙なる青霄の上に翔り昇り終には天に冲入るなり是を歌に引鶴と詠めりその天に冲し後はいづちの方にや立去りにけん終にその行へ見たるものなしとかや李淳伯相鶴經云、鶴者陽鳥也、千百年形定、蓋羽族之宗長、仙人之騏驥也、と見えたり今川伊豫入道了俊が子息仲秋に教訓の書といふものあり其中に鵜鷹逍遙を好む事を戒めり此了俊九州探題の時吾藩の禰寢氏伊集院氏などに連謀し　公室を窺窬せし跡當時の文書に著はしければ藩の爲にはいみじき謀叛人なりかばかり心得の點智なる男の教訓の條々には尤なる事多し晩年は其非を悟りて身を省みし事

ども有りしにや天文雜記といへる書に了俊若き折は放鷹を好みけるが或時大鷹を放ちて鶴を取伏せたり了俊悅びて駈着けしに鷹飼小刀を以て鶴の股を斷割て鷹に與ふ始め此鶴鷹と組合ひたる時は遁れんと羽ためきつるが終に人に捕られて股を割かるゝに及びては聊か動く事なく眼の色ましろがず了俊喟然として謂らく我日頃鷹の鳥を取て股を斷割きぬる時必ず聲を出しものくるはしくふためきぬるに今日鶴を割くに少しも痛ましき振舞なく從容として死を恐れず誠に鳥中の丈夫なる者也我萬物の長として禽獸の遊をなすは却て心に耻づる處なりとて遂に多くの鷹を放ちて再び放鷹の遊を絶ちたり是を肖柏老人か評して近頃は人の風俗も猥りがましく君臣の間も隔に離れて見ゆこざかしき人の戰場に臨みて心おくれ死を潔くせざる事あり鶴にだも去かざる

九州探題今川伊豫守
壯年の時鷹狩し鶴
を獲て手股を割く

者なり小人の平時に誇り亂世に逃隱るゝ類なりといひしとあり鷹を放ち禽を逐ひ鶴を擊しめらるゝは上天子よりして侯伯までの常禮なりつれば何の妨かあらん然れども其位に在らざれば禽獸といへども又撰ぶべき理りやありけん仁禮仲右衞門始め　慈德公の左右に侍して飯野表の御鷹野に供奉しまゐらせたるに田面の餌に着きたる鶴を公仲右衞門へ命して擊たしめらる其の間も遠く生物をば輙く射とるべしとも思はれども壯年の氣焰には己れに命ぜられしを時の面目におもひてければ奈須宗高が扇の的ばし射たりけん心地し眇つめて打つたるに過またず射中けるほどに一座の御感にぞ預りけるさるを仲右衞門老後子孫を戒めて必ず〳〵鶴をな射ぞと深く言置しは了俊を學ぶにはあらじ定めて其意に何とか覺えや有りぬらんかしと云へりさて小鳥などの渡鳥は西風の荒るゝ時にあり本藩の如きは山川兒が水邊に寄來る西風もて來るを思へば西土朝鮮の地方より來りぬらし鶴抔も炎暑は朝鮮の寒地に栖居し秋に至りて又本邦に來賓するにや唯蜻蛉の小物にして空高く翔りゆくこそいぶかしけれ

五月蠅沸騰

神代紀に群兒の蜂起して朋黨を結び喧嘩評論する體樣を形容せし辭に夜者若㆓熛火㆒喧響畫如㆓五月蠅㆒而沸騰と書されたり又推古紀には五月蠅群㆓空中㆒十丈鳴響如㆓雷㆒とも見えぬ蠅は四月より五月に移る頃ほひに生じて夏を通して多ければむかしより五月蠅とはよび來れりされど蠅の沸騰といふ事は聞きも及ばず麥稈馬屎抔より出生又灰より化する故はへと云などは誰も知れる事なるに我同僚の益救島に渡りしは三月

益救島天柱石之圖

安房村蘆より白山の絶頂まであり宜

天柱嶽の巔まで登るに雷霆を脚下に呼び蘆に雨降り山上に晴天なる事多し

益救柱は寅生にして年稍孟をなし業跡まして遠く望めば松の樹のごし

天柱石は天下無双の奇巖なり高サ三十三尋廻り亦同し寅卯の方本邦を西面とし西面の根前より人工にて割り出せる巨石あるを拜石と云ふは以たり亦奇なりとす

より四五月の交ひなるがいづかたとても晝は蒼蠅多くて座敷の席の上疊の目も見せぬ樣に群りて食物などに飛入り汚はしさいはん方なし夜は天井の板に止まりて忽に黑塗の板歟と疑はる島民にかく迄蠅の澤山なるは何よりか出生ると問ふ皆野原より生れぬ是は又いかなる謂ぞと尋ぬるに野原の地中に蛆出來て四五月頃には羽を生し一所に蠢々と累り起りて高サ三四尺も一團に簡立し其聲數十步迄も音なひ聞えぬさるを風の爲に吹散されてより〳〵に此人里に飛來ることにて候又蠅の簡立の邊を行通りぬれば其蠅忽に人の衣裳肌膚にひた〳〵と飛び着きて打てども拂へども去らず走り去りても跡を追て飛來りて終に人家に居止まる故自然とかく多く屯ひぬる事にて甚だ困り入る事なり扨其蠅ども夏過ぐる頃には物に食ひあきて川に臨み流に就て水を飲み候得は腹脹て飛立つ事ならず地に墜ちて夫限に死けりと語りけりといへり是にて蠅の沸騰ると云事の初めて實事なるを聞得たり古の時は此益救嶋の如くに荒野野郊原には蠅地中に出來てそが高く沸上りつゝ喧響こと小人の屯ひ聚りて小利口を吐き或は人を譏り嘲るなどの亂れ噪げるに似たるなるべし萬葉集にも五月蠅なす騷ぐ舍人と詠たるごとく口より出ほふだいに物いふは君子の上には稀にて小人の習ひにてぞありける毛詩に營々青蠅止于棘讒人無極交亂四國古文歐陽永叔が憎蒼蠅の賦にも佞人利口を以て人を讒言して其者の庸られん事を猜みあるは秀才を嫉妬て人をいひ倒すなどはいまもむかしもからも大和も變る事なし君長たる人その讒を信じ給ふにはあらざれども何某は何は能く候得共何の不足何の惡き癖ありなどゝ申さんに其の者を見給ひてはそ

馭讓郡益敎島ハ南海
炎激の中に屹立〳〵
夏月ゟ絶頂殘雪あり
千四垂ゟ環まる山川云
ふを以數ゟ数に八重
嶽と云天下の名山神
仙の秘区〳〵

の悪き所を面のあたり知り給ふにはあられどもそのものゝ面にくしとも又は疎ましくも見えて一ツ二ツ善事も皆あしき方に見なされて終に通鑑に全人なしと申けんやうに秀才は必ず時に遇ひ難き習なり嘗てある人相觀を稽古せし者の申ける相見は神通せざれば人の悪き所計り見えて氣掛なり見習ふ程の中が大事のものなり高皇産靈俯順衆言用天穂日猶有佞媚之失焉堯咨四岳舉鯀九載績用不成焉是皆神聖之跡豈可謂之不明哉而人之難見者如此矣況人相乎といへり

蓮鏡院白晝爲老狐所魅

鬼塚蓮鏡院てふ山伏あり日向諸縣郡庄内山田の中椎川内の産にてその地都城治所を距ること二里計りなり今は數十年の跡の事也蓮鏡院入峯苦行の勤修相積りて渠が眞言秘呪に逢へば水をも湯となし金還て水となすの効驗ありと近郷他境も稱しあひて申ける爰に九月の末つかた都の城の市井に聊の用事あり朝早く立出て行きける其中途迥の曠野を過るに道の傍なる藪蔭に一口の老狐いと背剝たるが能く寝入りたり蓮鏡院素て己が修驗の法力に驕り忽慢心芽して悪心起り腰に提げたる法螺貝をおつ取り直し徐々と狐の寝入りたるに近づき寄り狐の耳元に螺を押あてゝ思ふ様に吹立てければなじかはたまるべき老狐は一聲あつと呼びて駭きたち空中に五六尺も飛揚り轉ぶともなく僵ともなく逃出しながら跡のかたを五六度も顧眄つゝ竹林に這入りたり蓮鏡快氣に嚬笑て頓て都城に立越諸用を濟して歸路にかゝる其時まだ未の刻下りなり嚮に老狐を脅せし野路に來るは漸く申の刻計りになりぬ神無月の中の十日も稍近づくに日脚は猶遲々たり程もなく我庵に立歸り元來好の燒酒四五盃も飲なん

都城の蓮院院聖中に老狐の寂寞たるを窺うきんと桜尾螺を欣く

山神は肴ばし設置しにやなどづのみして急ぎぬるに忽に日輪桑楡に沒こと箭の如く秋の野の身に染み風颯と吹來り早や黄昏に過ぎぬる光景に蓮鏡こはいかにと驚く中長月の末の眞黑闇一寸さきは戸さしも志らず如何せんと案じ煩ふ處に前面に忽焉として一ッの辻堂こそ現はれたれ惟ふに此邊は是荒野の田地いかなれば辻堂の現はれしやらん覺束なしと疑ひながら烏羽玉の闇の現に前路も見え分ねば暫し此辻堂に休みてんと手探り足探りして堂の緣側へ這ひ着て仰ぎ見れば遙か向ふの田面道に火の光ちら〳〵と見ゆ漸々近づくに從ひ能々見れば葬禮の行列にて松明四五挺ばかり照し來り手々に鍬鋤持たる夫男ども五六人して堂の庭中に壙を掘る蓮鏡悚然としておもふやう此處はこれ桑梓の辻堂御座んなれいま〳〵しき所にも憩ひつるもの哉今にも新葬の傍に

一夜をだに明しかぬべしなど氣味あしくなりぬるにはや程なく送葬の棺を捧げ來り一ッの僧先導て鈴二ッ三ッ打鳴らし棺を土中に埋めて其徒各立去れば燒殘したる松明も程なく消失せて須臾に陰風襲ひ來り今さら身の毛も彌竪折節只今新葬の墳土蠢々と動きだし瞬息に其墳二つにさつと裂け破れ棺の蓋はね上るとひとしく年頃三十ばかりの女房顏色青ざめ三千條の眞髮を振亂し齒を叩き吻より鮮血を流し兩手を攤げ莞爾たる目元をして蓮鏡に立向ひあら懷かしやと歩み寄る蓮鏡これはたまらず堂の内に逃入れば又追來る今は昔伊弉諾尊の黄泉平坂にて八人の醜女に襲はれ給ひしありさまもかくこそ怖しかりしならんと魂を消して堂の鴨梁に飛上らんと躍りはねれば幽靈も猶後について引留む蓮鏡は生ける心地もなく堂の棟に弓手をまはし蜘蛛が網を破られて片

蓮鏡院前ニ狐を驚かし怪俄ニ眼ニ入る狐ニとゞまる辻堂に休み一時送葬をかゝ〻て重のおろす穴をほる

既に葬ひし墓の中より女の幽霊あらわれ出て蓮院を襲ふ蓮院恐れて辻堂の棟に逃上るを女の幽霊追ひ来り掴とさらん

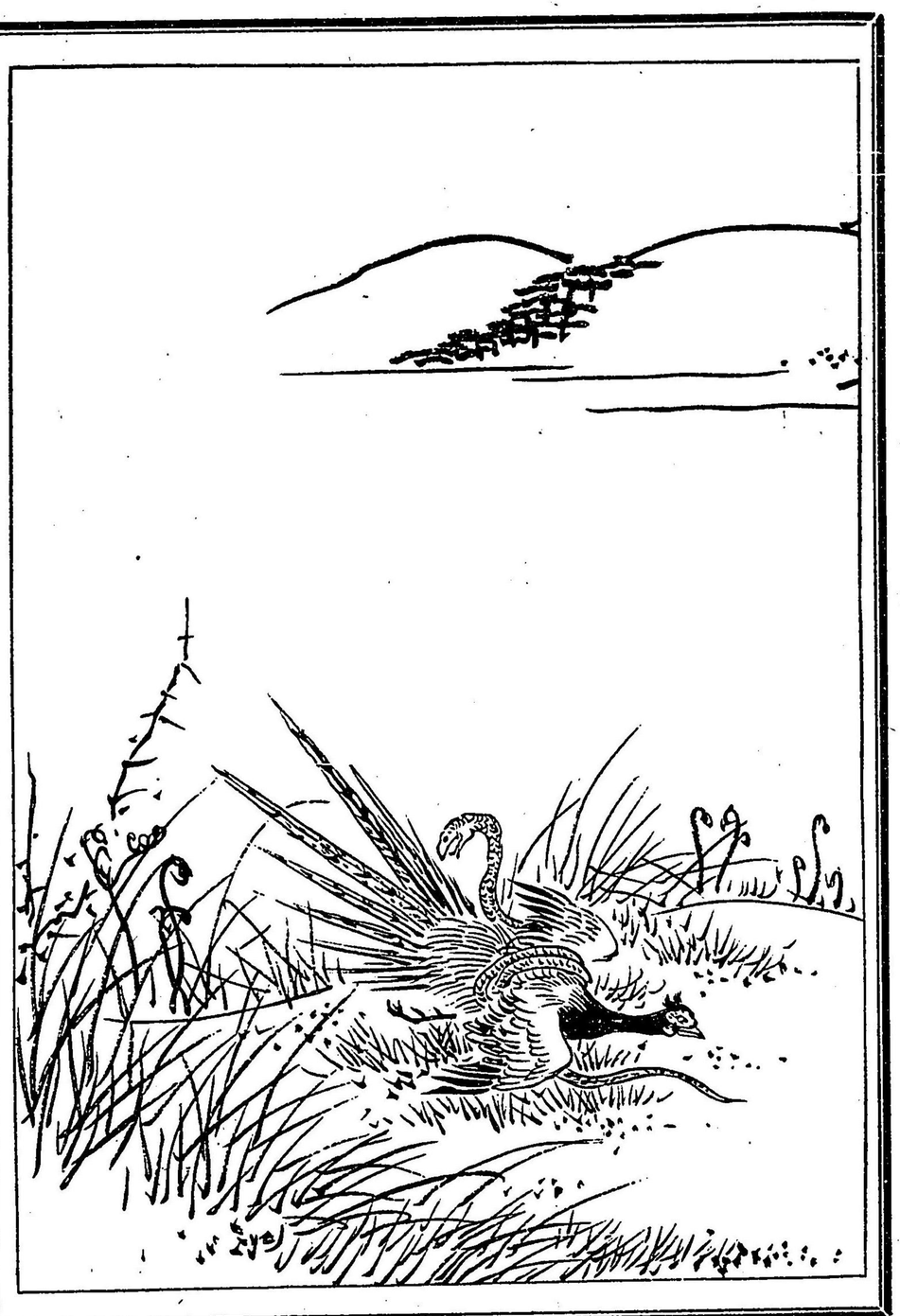
蓮統院を幽霊と
悩まされ辻堂の柱と
這上りしを後より函
霊の引付るとををを
と掃ひ退散んと後さ
まんををゐる小腦の
頭を振りあて心付
く必死にありて頭を
吹けハ辻堂と見しを
稲穂なり
百姓を方よ
りえてふろ
る

隅に縮み付きたる如く縋居たるに幽靈兩手を以て脊を撫で探る故片手を出し後べたを打拂はん〳〵としたるに腰の法螺貝に振り當りきとこゝろ付き南無三寶理源大師アビラウンケン助け給へと只一心一枚になりて吹立てければこはいかに夢の覺めたるが如く青天を見ればまだ申の刻下りにて堂とをもひしは稻積なり弓手を棟に掛けたるは稻積の上に掩ひしたる藁の頭の束れたるにて蓮鏡は秋の寒風に一身浴せし如く汗かきて茫然と四方を回視すに耕作に出たちし農夫ども五六人蓮鏡御坊は何事をなさるかとつけなし先刻より眺めやり候得ば御坊は小兒の樣に稻積の上に這ひ上り戯れらる只事ならず雉子の巣たちばし見つけられしよなと不審せしに法螺の貝を聞きて彌怪み馳來りたり何事なれば稻積の上にて樣々飛廻られしぞ本の氣ともみえずと口々に問はれて蓮鏡は大に愧入り都城にて過食し腹ふとくてちと要事致せしなりおのたちが見物せんとは存じもよらず麁忽麁忽どふぞ音なしにたのみ入ると其場はすご〳〵立去りて後日に此事を懺悔して咄しけるとぞ蓮鏡が孫今猶蓮鏡院と名乘りて庄内山田居住なり

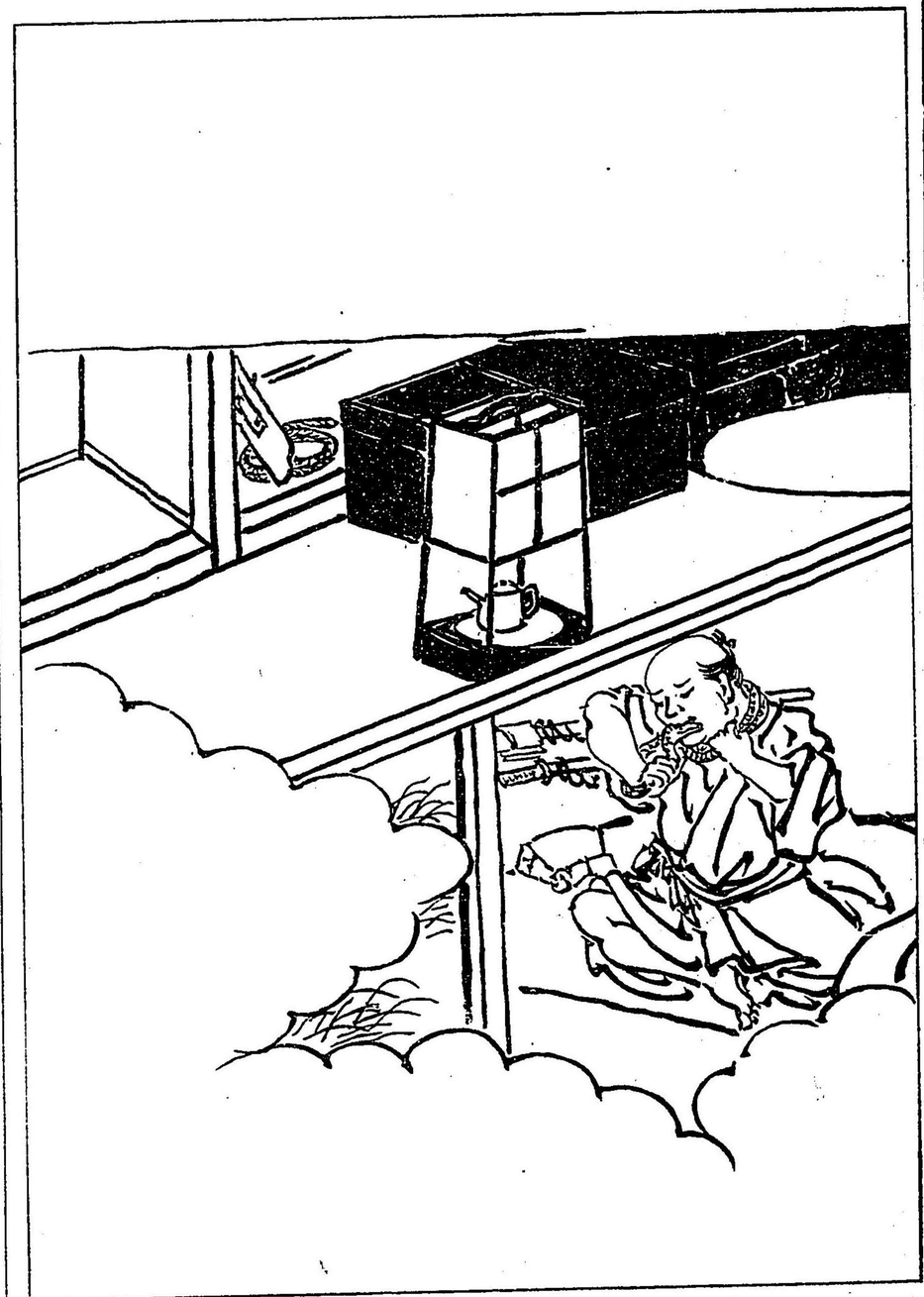
蛇性深怨念

諸縣郡高崎鄕江平村に長太といへる者あり膽氣飽迄强毅なり或時野に出て蛇の雉子の頭を二卷まきて下手をとらんと傍の草根に尻尾打卷かなんとす雉は脫れ去らんと羽ためく凡そ蛇の物を卷きたるには其尾を物に纏着かざれば其物を緊がたきよしいへり長太見付てうぬ何するぞ飛鳥捕らむと這ひ廻る太い奴と雉子を取りて我宿に歸り煮食らひて寢たる夜頸にひえ〳〵と物するを手にて探れば蛇なり晝雉卷を

本府の赤市来まく雉子を射
らんとて弓に矢をつがひ偶蛇の雉
子を巻くるをたてき放ち



蛇の生たる雛子を料理〳〵旅宿
まで帰たる甚兵衛夫婦頭を纏ひ
む葉を枕を捕へおのゝ雛をやく
い我腹よりてくらへを蛇の汁を二
口三口ごりく〳〵と嚙み碎き踊まて
焼酎を呑〳〵こう
飲〳〵ゆり



りしやつめならんと後手に取て庭に投だしつや〳〵寢入るに又物あり胸を冷つかす復取れば蛇なりおのれ怨念深き畜生め雉ほしくば我腹に入りくらへと蛇の頭を噬碎き燒酎にて其の臭氣を去りし事あり又日置郡市來鄕湯田村に本府德田某撿田吏となりて旅宿せし時宿の主おのが畠に雉の雌雄とり飛び騷ぐあるじあやしみ見れば長さ三尺計りの蛇雉巢の卵を呑まんとす主鍬して打ちたれば蛇は藪の中に走り去る主その雉の卵持歸りたるを德田某其卵をもらひて食ひぬその夜德田が寢入りたるに蛇來りて頭を纏く捕へて其蛇の頭咬みきり主の老婆に燒酎を求めさせて飲しと云是も江平の長太が事と相似たり世に女は蛇性といふは嫉妬ふかき女は蛇になるとの諺なり梁武帝の后德氏（南史德皇后の紀）元の張鑑が妻（燕后筆記）皆蛇に化たる事實錄の載する所なり此間日高川の狂女も其類なるべし又其妬心の慘刻ものなり遯齋閒覽云婦人之妬出於天性殆不可開諭陳好古通直曰四十年前撫州監酒范丞者妻色美而妬范甚寵憚之同輩每休暇招妓燕集皆不得預一夕范輪次直宿謂有告私釀者范晨率吏卒徑往搜捕其同寮李供奉平日與范無間素知其妻妬乃戲取宦妓奴履密置范臥具中須臾務吏挈衾裹歸妻披衾見履神色沮喪詰吏所以來吏對不知於是泣恨良久因拊心而呼曰天乎吾至是耶乃入室闔戶而寢頃之范還而排戶而入則妻奄然死矣又有人任湖南倅妻生一子始及晬倅甚愛憐之偶一日郡主有告倅攝郡事會鄰郡太守過郡與倅有舊倅爲開宴命妓佐酒妓中有一人差秀慧者立侍倅側倅頃與語及戲爲酒令咲語方酣見鈐吏擎生肉二盤一置倅前一置客前倅驚愕問其故則其子之肉也蓋妻忿夫與妓語乃手刄其子刲肉以獻其忍毒至此又群居解頤云李福妻裴氏性妬忌姬侍甚多福

滑臺の諸守李福を高裴氏ゥ沐ふを伺ひ腹痛まゝ偽りて婢をして後を捧しむ

李福ら妻娶氏沐の事よ吏の李福傷く腹痛
事やつを住と却ひて大よ憂へ為り小児の溺
りを吏よ飲す　小児の小便ハ腹痛を止ることを
以てあり

未嘗屬意、鎮滑臺日、有獻女奴者上福意欲私之、一日乘間言妻曰、某官已至節度使、然其所指使者卒不過老僕、夫人待某無乃薄乎、裴曰、然、不知公屬意何人、即指所獻女奴、裴諾、爾後不過執衣侍膳未嘗得一繾綣、福囑妻左右曰、夫人沐髮當報我、果有來告沐髮者、福僞言腹痛且召其女奴、左右以裴沐即告福所疾、裴以爲信然、遽出髮盆中、問福所苦即若不可忍狀、裴極憂之、以藥投兒溺中進之、明日監軍及從事悉來候門、福即具以告之、因曰一事無成、固當有分、所苦者虛咽之一甌溺耳、聞者無不大咲、（兒の小便腹痛を止るなり）

倭文麻環卷之九終

倭文麻環卷之十

目次

筑前莊浦仙女
天狗說幷山川談
幽靈還書
大蜘蛛幷大蛞蝓
登龍異說幷鼈龍怪物
毒蛇知恩

倭文麻環卷之十

筑前莊浦仙女

筑前遠賀郡の浦人共の中に同じ國伊萬里の瀬戸ものを船に積て諸國を廻り商賣をなす者あり然るにことし天明二のとし壬寅の五月奥州津輕に至り船宿に滯留し乘組の者共銘々日々四方に出で行き買荷をかつぎ市中村落を徘徊して賣ひさぎけるに其内一人（此者遠賀郡芦屋の産今は錢の島稻荷丸乘組なり）ある日山路にふみまよひそこはかとなく吟（サマヨ）ひけるに谷川の水にふたがひて野菜の屑の流れ來るを見て扨は此みなかみに人里ありけるよと力を得て川にそひ尋ね行きけるが數十町をへて女房のせんたくし居たるに逢ひぬ某は旅の者に候が道にふみまよひて東西をわかずやうゝ是までたどりまゐりて候いづ方へ行きてか里には出で候ひけんや教へ給へと申ければ女

筑前遠賀郡芦屋の浦人津種の山路を踏迷ひ仙女を尋ふ

房答へけるは此處は深山がくれにてあき人などの參り通ふ處にも侍らずいかゞしてふみあやまり給ふにや是より里まで出で給はんには頓て日も暮れ侍るべしいたはしさよと申すその言葉にすがりいかにも晝の内だに前後を忘れ候に況して日も暮れなば狼のえじきとなりぬべしあはれすのこのはしになりとも今宵一夜を明かさせ給はらば一命を助け給ふにひとしかるべし偏へに賴み入り候と手をすりて申ければあき人にはいづくの人にて候かと問ひける程に九州筑前の者なりと答へければ此女いと驚きたる樣にてあらなつかしのつくし人やとうちなみだぐむばかりなりいかなれば五百里計りもあなたなるつくしの者と聞きてゆかしきさまに見え給ふ事のいぶかしさよと云ひければ女はな打ちかみてされば身づからもと筑前國のあなた庄の浦と云處のものに

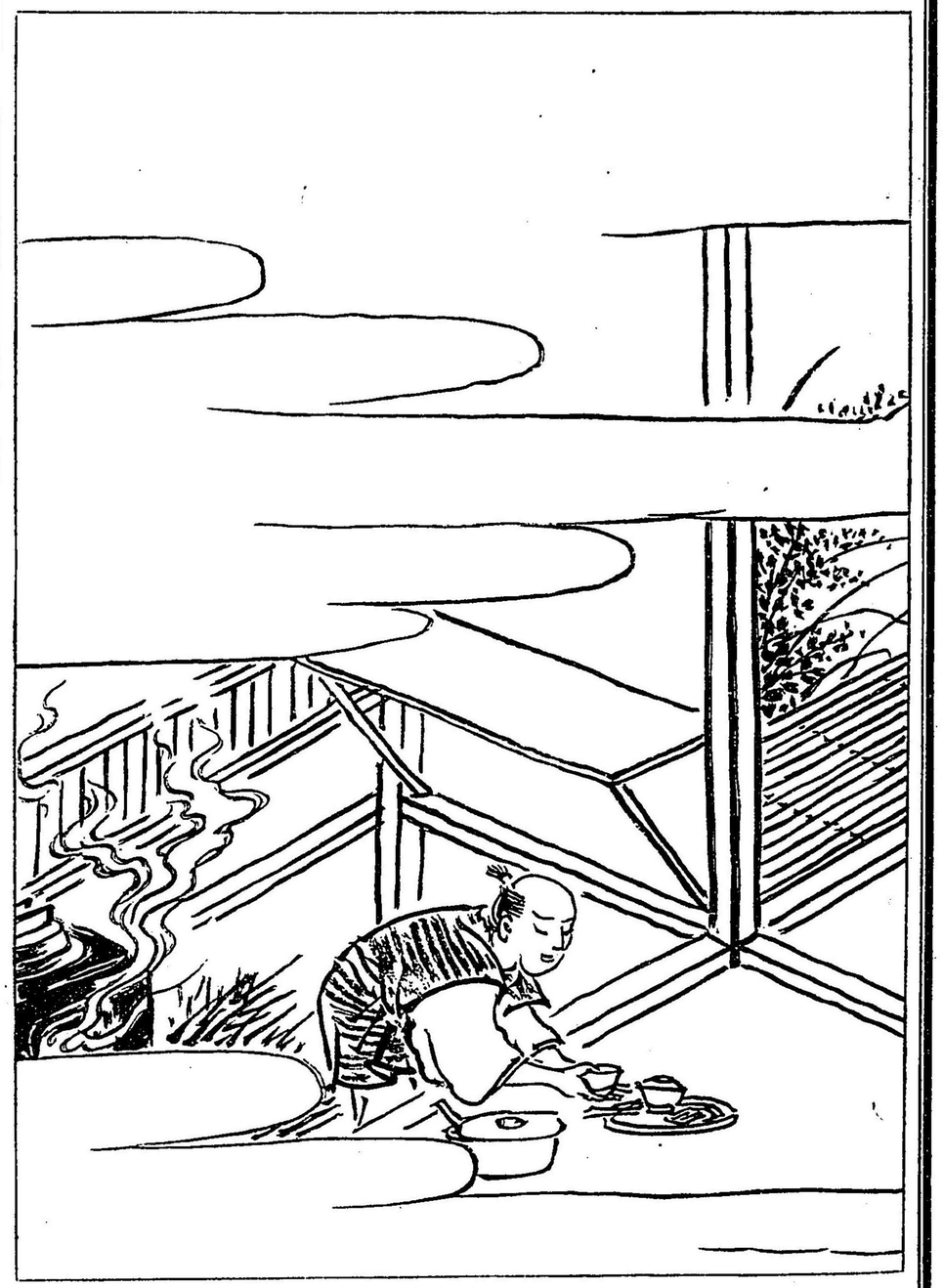
候（此女生れて遠賀郡芦屋に十七歳にて博多へ縁付せしかど不縁にて其後鞍手郡八尋村へ縁に付其處も不縁にて二十五歳にて庄の浦へ嫁しこれ男子女子各一人をもてり）ふしぎの縁にて本國の人にめぐりあふも一方ならぬえにしあればこよひは見ぐるしくとも草のむしろに休ませ玉へ夜もすがら故郷のものがたり申侍るべしいざさせ給へとたらひかつぎ先に立てあんないし我屋に伴なひけるにさのみ住みわびたる體にはあらずあるじは他行にて男女二三人ありて志たゝめなど取りまかなひいかに草臥給ふらんいざやすらひ給へさるにても故郷の親兄弟にも逢ひし心にも候得ばよもすがら御物語申侍るべしとあやしくもおぼすべけれど御國への土産ともおもひ給へかしと灯火かゝげ膝立て直して語りけるは抑みづからは山鹿のかたはら庄の浦（山鹿より十町ほど）といへる處のいやしき海士の子にて候ひしその頃庄の浦は山鹿刑部丞と申殿の領地な

芦屋の浦人仙女の物語りをきく

りしに壽永とかや申歳の頃　安德天皇と申奉りし御門帝都を落させたまひ西海に漂泊まし〳〵刑部殿を御賴ありて山鹿の東なる山奥にかりの御所を搆へ御座せし時はみづから もよつきのあまの手なれしわざなれば磯ものなど取りて御所にも追々つゞけ侍りしなり一とせみづから病に臥しける に日にそひ夜にまし朝ゆふ食事つや〳〵參らず疲衰へしかど片田舍の事にて藥を服するよすがもなくひた弱りによわりもてゆきて今はなか〳〵いくべくも侍らざりしに男の子女のわらは二人もち侍りしがいと孝心に候ひて枕につきそひなげきあかしつゝ侍りし扨て或日磯に出て一ッのほら貝をひろひかへりて是をよく煎てとゝのへ進め侍りしに其味殊の外よろしく覺えしより少しづゝ食事にもくひ付きける故朝夕二日三日が間其貝をさいとなして悉く喰べけるにやが

て病は本復せしより體も又すくやかになり侍り其後は終にやまひと云事をたらずいく春秋を重ねても老衰のかたちもなしかの梭尾螺は音にきく不老不死の藥にてもや侍りけん今おもひめぐらすにはや六百餘年と申むかし語りにてもわれながら我身をばきたいにいぶかしき事と心におもふ計りなり扨てかぎりある人のいのちなれば夫なりける者も世をさり子供もうしなひ孫もみな死しひまごやしまごも皆々壽命をたもちてなくなりぬれどもたゞわれひとりは猶つれなくも數度のうれへ歎きにも面影だにかはり衰へもせでながらへぬるをわれながらいと疎ましくある時は海川へ身を沈めてなどおもひ立ちし事など度々なりしが或時は人々にさゝへられ又ある時はいかなれば斯くは侍るらん唐土の仙人とやらんこそ我が如く長生もするよしなればよしやながら

況前莊の浦瑳の子
母を看病〳〵孝養
を尽す



へん時迄生きて見ばやともおもひかへす事も侍りつゝ世をふるまゝに我が住む里のわたりなるくきの海もくまぐ干潟となり神功皇后の御船をつなぎ給ひたりし所もいつの程にか畠となりいばら山蜑瀬岩瀬などいへる所もみなほのかの名のみ殘りてむかしの跡かたも見えず變り侍りしかば今はさこそ飛鳥川の淵瀬とかはりし海山川里のけしきおもひやられ侍るさればこれ迄の間にはみだれし世もありをさまる時も侍りて色々様々の事ども侍りしかど女の身の上なればよくも覺え候はず去る程にいつのほどにや住みなれし故郷も住みうくおぼえければ國々の宮々寺々など拜みめぐりみばやとおもふ心のひたすらにおこり侍りければ子孫のもの又は所の人々に暇をこひ先づ初めて豊前の國をめぐり豊後の三穂の浦とかやいへる處に年を經て其の後伊豫の國へ

渡りこゝにも多くの年月を越え夫れより土佐讃岐淡路の國々弘法大師のたふとき古跡も拜みめぐり舟にのりて長門の國へわたり出雲伯耆石見などにも年を經て因幡の國へ參りぬ爰に法美郡とかや御社のおはしけるをぬかつき侍りけるに所の人もまうで來りて旅人はいづくの人にやとありければつくしのかたほとりの者にて候也この御社はいかなるおほん神にてわたらせ給ふにやと尋ね侍りしに是ぞかの六代のみかどに仕へ給ひ三百歳をたもたせ給へし武内の大臣におはしますなり御身も若き人なればことぶきをいのり給へときこえけるわが身の上のいとけうとくうとましく候ひしかどさりげなくもてなしげにくめてたき御神の御ことぶきにあやかり申度こそなど申て何くれ物語り侍りけるにわかき女性のひとり何國へかまねり玉へるといふ程にきはめ

猛の子兄妹母の為に
壽布貝を拾ふ

因幡國法美郡武内宿禰の社

たるあてども候はず只諸國のたふとき宮寺など拜みめぐり候なりと答へければいそぎの道ならずばしばらく我もとへとゞめ申べしと進むるにまかせ其の人にともなひ行きしに家とみさかえいやしからざる農家にて候ひき此人やもをなりければ所の人々にすゝめられて妹脊の語らひをなす事年久しかりしに夫はとしに志たがひ老さらぼへども我はさらに老かはりもせず侍りしかば後の人々あやしみ化志やうのものにやあらん又は切支丹などいへるものにや侍らんなどひそめきわたるをほのきゝ侍りけるにより こゝにもとゞまり難くひそかにすべり出て都の方よりあづまの國々をめぐりさいつころよりこのみちのくの津輕の郡にまぬりしが又もや人々のわりなく申給へるにかたくいなみがたくて此家のあるじに嫁し侍るなりみづからつくしに侍りし時まで

は今のわたと云ものなかりし故麻をつむぎ布をおる事千反あまりなりしさて故郷を出でし頃かのほらがひのからをわがいのちの親なればとて所の神職なる人をたのみてちいさきほこらのありしにいはひ納めてわが姿とも形見とも見よかしと申殘し候ひけるが今はかぎりもなき年月に候へばいかゞなりゆき侍りしやらんも志かはあれど其の祠のわたりに船留の松とて大なる木の一トもとありしなり松は千年のものなれば今に朽木ともならで侍らんもはかりがたしもしかしこにいたり給ひなば是を志るしにもしわが子孫なるものなど侍らば尋ね出し此物語をも聞かせ給はり候へとて夜もすがら語り明かしけるよし此あき人ことしの神無月庄の浦へ尋ね來りて傳次郎といへるものゝ家にかのほら貝の侍りし事を見又ほこらのかたはらにかの松のあるを見ていとゞ

奇異の思ひをなしたかゝのよしを物語りしけるとなり

一按に船留の松といふは昔此松に船を繋ぎしと云ふ樹の下に貴船社有りこれかの貝ををさめたりしといへるほこらなるべし古紀に神功皇后三韓を御征伐の時洞の海を乘らせ給ふ時御船すはりて進む事を得ず此時御船をとゞめ給ひて神八井耳尊の遠孫多氏をして舟の神をまつらせ御みづから松を植ゑさせられて後のたるしにたま給ふといへり其苗裔多の武諸木の末多の武乙隅の子多の諸乙麿と云人天喜の頃此處に住しけるよし今に多氏屋敷と云あり諸乙麿の住みし所なれば今乙丸村と云なるべし是庄の浦の本村なり

一此村むかしよりはやり病に染む事なしと云ふたま〳〵病ひある時にかの法螺貝に水を入れて飲む時はたちまち快しとかやこのゆゑに古來より醫藥と云ふを服せし事曾てなしといへり

一近村にはやり病入る時は此貝を吹て疫神を祓ひしが中ごろこの事止みてけるを元文の頃より又前々の如し

一古來の說に此處を壽命谷と申けるよし此女の長壽せし故なるべし又この外にも長壽の者も多かりしならん

一二十四五年前の風俗に因幡の國に筑前より來れる女とていつまでも年よらざる者あり皆々あやしみて切支丹宗などにやあらんとて役人より國退させしと云ふ話ありし此たびおもひ合せ侍れば彌此女に相違あるまじきにや然れば奥州へ行きしはさのみ久しき事にはあらざるべし

一奥州へ行きし商人へ逢ひ女の次第細々の咄聞き度此春詮議せしに去冬又々右の船へ乘り津輕邊へまかり八月末九

月にかけ錢の島へ乘り下るよしなれば咄の始終不詳いと殘多し久伯此冬山鹿へ滯留せしうち此物語を聞きしかば庄の浦へまかりて彼ほら貝を見侍りしにいかにも古物とおぼしくて口のあたりなど所々少しづゝ損じたる處もあり即ち圖せるが如し其外此浦新古の圖并に物語の詞に付て昔の有樣などおもひやりつゝみだりに摸寫してむすめどもへあたへ侍るは元よりかれが子供の孝心より出てたることなりとゝらしめんが爲めなり

梅仙齋　岡部久伯

遠賀郡乙丸村の内庄の浦百姓傳次乍恐申上る口上の覺

一私家に持傳候壽命貝と名付候保良貝一ッ此節差上候樣に被仰付則差出申候右の貝何れの時代より持傳候哉と御吟味被仰付奉畏候私儀は代々乙丸村百姓にて纔計りの高をもかゝへ年久しく庄の浦と申處へ相住居申候間右の貝持傳居申候へども何れの代よりと申儀も傳り不申候何さへ書付類も無御座候私曾祖父を彌右衞門と申八十四歳迄存命居申候其子權次郎私爲には祖父に御座候私親權市と申此兩人も八十歳餘まで存命に有之又以前より病など流行仕候ても私家内には相煩候儀無御座候箇樣の故にて右の貝を壽命貝などゝ申ならはし候事共に可有御座候哉と奉存候外には何さへ相氣付候儀も無御座候乍恐右之段よろしき樣御聞通被仰付被爲下候樣偏に奉願上候以上

乙丸村庄之浦

傳　次

寛政九年十二月四日

坂田新五郎樣

御役所

遠賀郡乙丸村庄屋儀平申上る

口上覺

一當村枝郷庄之浦へ古來より持傳候ほら貝此節御上御用に付御役所へ差出候樣被仰付則ほらかい主傳次へ爲持差上申候右ほら貝持傳候次第申上候樣に被仰付候へども何さへ村方へ慥なる書付等無御座候併往古右ほら貝肉喰候女今以て遠國致長壽居申候由六十年以來の風說有之老人の咄に承及候處又候三十年以前同樣の風說御座候得共村方へ趣意存候儀少しも無御座候尤村中流行病又は牛馬相煩候節など次第は存不申候得共右ほら貝持廻來申候其後天明壬寅年同樣之風說專御座候間世上より取りぐ咄仕候に付咄之趣寫留所持仕候者隣村に御座候是を以て御役所へ難差上奉存候へ共御內見之爲ほら貝に相添へ差上候何れとも御奉行樣御前宜被仰上可被下候偏に奉願上候以上

乙丸村庄屋

儀　平

寛政九年十二月

坂田新五郎樣

御役所

天狗說

皇國天狗の說行はるゝ久し必ず深山幽谷の間に妖あり其形鳶鷲に類し隆鼻にして鳥嘴あり又或は兩刀を佩て僧法師山伏の扮粧に似たり或は身を隱し空を凌ぎ奢るを惡み滿るを害す儒者は是を魑魅山精と辯じ釋氏は是を魔波旬の屬といへども未だ天狗の生寫とその屍骸を見ざれば何とも究めがたし大峯大山には諸國より入峯の山伏參詣の野人どもを欺

く事を仕習ひて天狗の化物を作りたて杉の梢嶺の岫に隱れ居つ聲を揚げ貝を吹き樹を搖り羽音を眞似て愚人を誑す仍て天狗の傭ものとて江戸無賴の徒などは遠州秋葉山に賃取りに拔參りすといへり今和漢の書天狗の名字に涉るを粗左に抄錄す昔舒明の御宇に始めて天狗の字有り其解說に曰天上怪星の變化なり世俗の所謂天狗にあらず源氏語に所謂天狗木魅等の物是なり晉書天文志曰、天狗狀如火奔星色黃有聲、其止地類狗、所墜望之如火光炎々衝天、其上銳其下員、如數頃田、處、或曰、星有毛、旁有短彗、下有狗形者、或曰星出、其色赤白、有光下、即爲天狗、一曰流星、有光見人面、墜無聲、若有足者、名曰天狗、其色白其中黃、黃如遺火、狀主候兵、討賊、見則四方相射、千里破軍、殺將、或曰是將鬪、人相食、所往之鄉、有流血、略下是は皆星の名なり先年海見島の野に鮮血一段ばかり流れ居たる事ありその時色々

評議してもたれざりし蓋天狗星の流血といへり、又博聞錄に云山陰有獸、狀如貍、首白、噉蛇、名之天狗、又杜工部有天狗賦、云夫何天狗、嶙峋兮氣獨神秀、色似狡猊、小如猿狖、忽不樂雖萬夫不敢前兮、非胡人焉能知、其去就、是皆獸の名なり又一說國俗稱魑魅爲天狗、其怪相似、異稱傳、或問曰、藤賴長台記云、愛宕山有天公飛行、說所謂天公者、何物乎、答曰、嘗見朝鮮鄭道傳、謝下魑魅文序、云會津多大山茂林、僻近於海、曠无人居、嵐蒸瘴泄、易陰、以雨、其山海陰虛之氣、草木土石之精、薰染融結、化而爲魑魅魍魎、非人非鬼、非幽非明、亦一物也、日本天狗殆庶幾于是、與西土書之木客山獠似而非也、深山窮谷、往々有是、其形不可見或現大身、則長人如僧、高鼻勾爪、復現小則羽化騰雲若變作異形惱人、强字之曰天狗、蓋象惡星也、又山海經云、天門山有赤犬、名曰天狗、其光飛天、流而爲星、長數十丈、其疾如風、其聲如雷、其光如電、癸辛雜識云、丙申十一月十

七日、冬至此夜三鼓、有大聲、如發火炮、震動可畏、鷄犬皆鳴、或云天狗墜故也、應仁記曰、寛正六年、九月十三日夜、三更亥子刻、天狗流星飛、又谷川士清が和訓栞に天狗をあまつきつねとよみて星の名なりといへり其疾如風其聲如雷震動可畏なども諸書に見えたりかゝる妖怪により天津狐とは訓みしなるべし又東鑑に文暦元年二月南都に天狗現怪一夜中於人家千餘書未來不之三字尤爲奇怪云々又天狗靈託の事あり源氏語にてんぐ小だま抔いへるは魑魅の類にて或は老鷲の化する者といへり我邦ことに異說多し是も又星の名より出て遂に又狐に天狐地狐人狐の別あるに至る四書類函に狐千歲與天通爲天狐、と見え台記には天公とも見えたれば鳥獸共に天狗の名ありと鳥にはかはせみ獸にはまみ也幽明錄云、王姥病死自朝至暮復甦云見一老姥挾將去飛去見北斗君有狗如獅子大深目伏井欄中此天公狗也、と天狗の字は是に據れるにや杜子美が天狗賦に上揚雲霄兮下列猛獸、といへるは三秦記謂有天狗來下有賊則天狗吠而護之、といふ者なるべし又五朝小說に載せし飛天夜叉といふ物塔上より降て婦人を攫む形見梟鴞に似たりと又廣西通志に一人約するに長二丈面の濶三尺餘長さ是に倍す披髮鳥嘴背に二翼ありといふもの是正しく俗にいふ所によく合ひ其人夷語を能くすともいへるは此邦よりや渡りけん古今談概、元伊世珍、嫦嬢記云、君子國有鳳凰嶺、出天狗、一名胎詹、と君子國は蓋し我邦を指すなり又一種の天狗といふものあり遠州掛川の近邑西方村龍雲寺の小僧に福天といへるに天狗乘りうつりていふ我を勸請し一祠の神とせば此所の守護神たらんと禪寺なれば多くの和尚吟味ありしに數百年來の事を說話し奇異さまゝありしを以て寺前の山を開き一

社を造創し福天權現と號す又告げにより土中より鈴を掘出せり驛路の鈴なりしとぞ俗に謂ゆる秋葉山是なり又生ながら天狗に化たりしは元亨釋書に仲算が童兒の事を云て潛に入山誦經不食月餘既而得羽服成神仙とみえ釋の湯勝仙を得て後吉野山にて息眞に逢て我身中无血肉遍體生奇毛といひ身生兩翼飛遊空中と見ゆ楚辭註に或人得道身生羽毛ともあり此他は徂徠が天狗說又天狗名義攷に著したる事長ければ省きぬ又世に素戔烏尊の本地金毘羅權現を天狗の形と思ふもの也是は讃岐國河野郡白峯の地は保元平治の亂に崇德帝遷されておはしける處なり此帝こゝの松山に住ませ給ひしとき松の浦にて御つれ〴〵に磯貝を拾はせ給ひ「松山の松が浦風吹よせば拾ひてたのべこひわすれ貝」と詠せ給ふより此浦の貝に松の字山の字の模樣を現すといひ傳ふ此こひ忘れと宣へるは世俗の懸想怨家の戀にあらず帝心ならず帝都を離れて播遷の患難に沈み給ひしかば一たびは歸洛の叡旨おはしましけれども其宸筆さへ都の中には置かれまじきと不友情の白河院のあしらひを憤り給ひ生ながら大魔王となりて四海を惱亂せんと嗔恚の火むらを焦がし歸京の事を思ひ斷ち給ふ御歌とかやされば御髮を結給はず手足の甲をも剪玉はず自然と天狗の狀のやうに見えさせ給ひて崩御なり夫れより象頭山金毘羅權現に會祭りしかば金毘羅は崇德天皇と申せりとぞ金毘羅の名は藥師十二神の一つにして神とも佛とも分けがたく亦天狗といふものに似たる說なし天狗は舊事大成云服狹雄尊猛氣滿胸腹之餘吐化物成天狗神鼻隆耳長利牙似獸大成經は後の杜撰なれども素戔烏尊を金毘羅と冥合し又金毘羅の形像を所謂天狗てふ者に擬たるは最久し

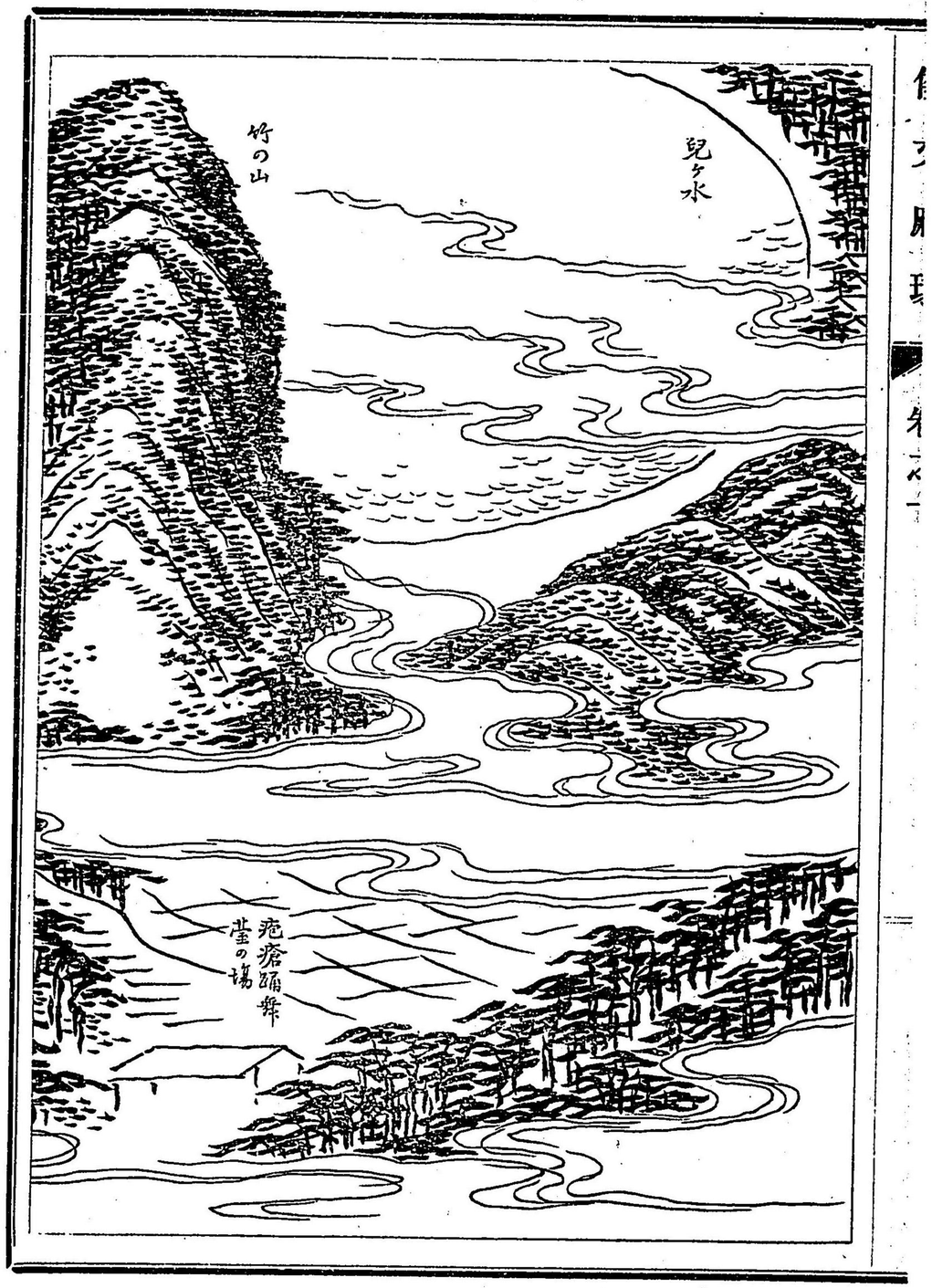
きよりの事と見えたり並に其圖せし所は向に記する處の五朝小說廣西通志の說に符合し多くは解魔法師の扮裝に類たるは好事者の戲れのみ抑我藩高山峻嶺餘國にまさり靈獸奇鳥の遊棲する處盡く其事跡を擧ぐるに暇なく其内世人の稱道する天狗の恠あり樵夫獵師まゝその恠事に逢ふ事あり其狀忽ち一陣の大風吹起りて砂を飛ばし大木を倒し岩壁を崩し須臾の間に天地震動して百千の雷一時に鳴落るか如く鳴動するものあり俗に名付て是を天狗倒しと云其風止み鳴靜まりみれば樹木岩壁依然として如本更に樹木枝葉の拗折れし跡もなく岩壁片石の碎け騫し形を見ず恠異細大枚擧すべからず蓋し山谷氣を泄らし雲を吐くの時にして老精の屬或は是に乘ずるのみ爰に潁娃郡山川の中竹の山と云處に往古より恠ありて土民天狗のたわざとし至て畏れ敬へりそもそも竹の山の地たるや開聞峯の下に屹立して突兀として山勢海を壓し遠く望めば巋然として烏帽子を双べ立てたるが如く誠に神仙の幽窟ともいふべき光景なり爰におとゝし文化八年己未十一月二日の夜官船神明丸五更の頃此竹の山の左に當れる蔦の口と云山下に碇をいれしに忽ち竹の山に鞠のごとき一團の火光起りしかば船中の者ども何事ぞと奇み居たりしをいづくより來りけん神明丸の帆柱の上に一人の大人手に提灯のやう成るものを燈して蟠居し有樣冷しく恐しさなどは筆鋒に述べ難く船の表間板にて碇綱をこしらへ居し者共先に仰天し魂魄を失ひ間板より飛下り手足の置處を忘れ前後不覺になり船窓の中に隱れ集りしが乘組中皆々難儀の目に逢ひし内に頰へ豆粒程のもの當ると覺えて直に倒れて息絶えしもあり此神明丸の檣の本より一丈斗りの所を

雁ひ天狗
とる柱
の指よ
り羽
音を平て
人をお
どろ

天狗の生品
も大儀な物ぞ
木の上にいよい
こうげんよ面
どもをるうよい
面はうぶりて
よい作りをほう木
ま引ぞ

日高素ふ山伏大峰
の籠り処まくよなく
物の奥まるをいそう
ぬ夜伺ひまれ天
狗の術の者あり捕へ
と追まれ跡まく天
狗の作り羽根ときんの類
を拾ひとりく天狗の化物
をあらき者

拜所
竹の山
北面の圖
鳶の口山
ヲヒカス
俣河須


竹の山
兒ヶ水
疱瘡踊舞
塋の場

竹の山
石の鳥居

竹の山
南面の圖
拜所
鳶の口山
俱河須
此あたを泉水と云
夜船を繋て破損
せしあり

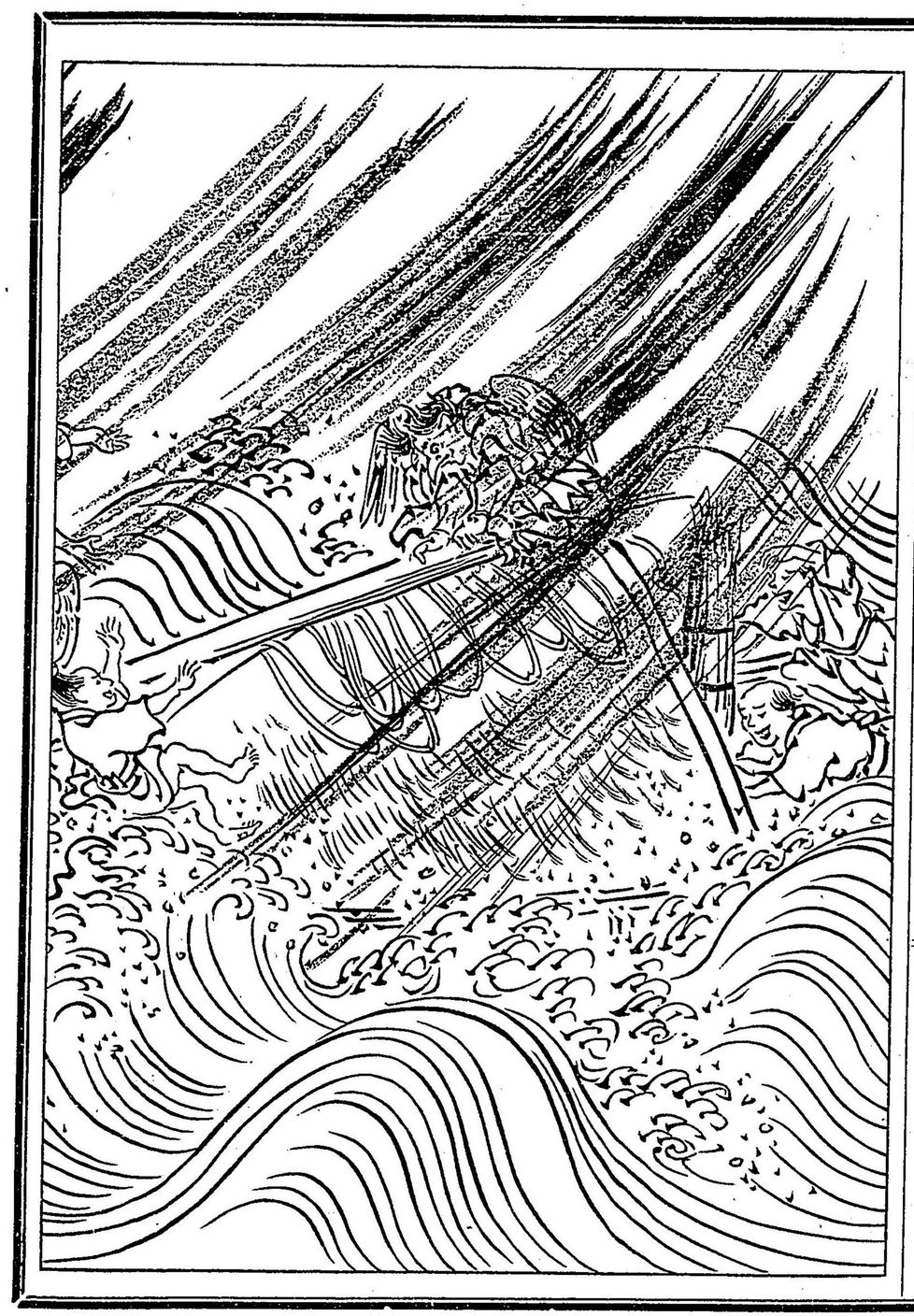
大永元年辛未
十月洛僧巢
松詠明使党
仁如繫船於
山川津詩

津號山川君客
居夏中已過又
秋餘欲論二十
年前事浮世忽
々不易除

山川麓

中納言家久公
おうぎに
浪路分来る
唐人乃船も
のぞかやたのむ
山川

御番所



官船神助九山川竹の山の下に船を繫きたるよ俄ょ天搖曇り陰雨忽降そゝき突人火を燃して飛入帆柱を伝ひ走る奈廻の者ども船底ょ逃潛り

拗折したりいかなる大風霹靂にも例なき事なれば人々奇怪の思ひをなしにけるとぞ右神明丸の繋りし所は泉水とて鳶口てふ下にて昔より船を繋がさる場所にてありし處に神明丸不案内にてこゝにかゝりしなり因てかゝる怪異の災難に遇たり當夜漁船に四五人の乗組にて竹の山の沖へ漕ぎ出でたりしが是も五更の時分より雨そぼ降り漸く強くなり鳴神も勵敷轟きければ乗組中船漕ぎ戻す折節竹の山の方を望めぼ星の如く火の光相見得ぬ乗組の内もはや夜明の明星こそ出でられしとも云又否とよこれよのつねの火にあらず不審の物ぞかしなんといへる中に忽その火大サ斗の如く其聲如雷其疾如矢竹の山より鳶口をさして飛びたりしが其跡しばしは虹の如く相見得つゝ又々竹の山鳶の口兩山へ火燃え起りて身の毛もよだつ斗りにて急ぎ船漕ぎ戻したり其後二三夜は竹の山に火燃え起りて紛々として如螢火絶頂に上りて一ッになり廻り壹丈有餘の火となりまた間もなく消えてまた如此なる事一夜に何ヶ度も往來したるを所の人々親しく見たる事なり又竹の山の絶頂に天狗の遊興と名づけて大鼓笛梭尾螺の音などする者終夜なる事これあるよし是は益救島の嶽に秋八月頃は常に鳴笛の聲をなすみな人の知る處なりこの外人跡到る事罕なる地に笛鼓の音をなせる所間々ある事なり是等は深山靈木おのづから天籟に感し妙音を發せることと別に考あり又先年鹿兒島より某兒ヶ水の溫泉へ入湯に差越たりしが頃は梅雨の晴間なく海龜の卵産にあがる時なれば潮涸の時を候ひ鶏鳴の頃濱に出で龜の卵を取あるきしがあまりの面白さに覺えずも竹の山下迄行きたり時に小きほら貝を吹きならす音聞ゆ間もなく耳元に吹きならし來り

山川郷竹の山の化物

しかば手を以て拂ひのけ拂ひのけすれども更に止まず駭きて兒ヶ水さして逃歸りしが溫泉場に到り忽ち氣絶したるを人々介抱して漸く蘇生せしとかや又四拾年以前の事なり或時兒ヶ水居住の鄕士丸山新左てふ鄕士と同じ浦の紋兵衞と云兩人血氣盛りの男兩人私用の事ありて山川の麓へ列れ立行き歸路沈醉の餘り傍若無人の有樣にて千鳥足踏ならし小歌淨瑠璃口さみせん夜の更くるも忘らで行く程に竹の山の下なる樾松海道を半ば過ぎしがあな畏しや金剛夜叉のあれたるが如く高さ二丈有餘の大山伏仁王に立跨り眼は百錬の鏡に朱を濺ぎたるが如くなる者礑と睨みて右に携へし木瓜紋付けたる提灯燈しかけて差出したる腕の大さ誠に松柏を横たへたるごとくなるに黑ひげの生えしは錐をうゑたるに似たり今迄騷ぎし小歌淨瑠璃口さみせんはいつか餘所にたまりつめ忽ち身心惱亂して魂魄を失ひ進退茲に窮まりて卒發心息の中にて不動の眞言も聲ふるひ薄氷の上を踏む心地して燈し掛けたる提灯の下を鼠の如くに一足飛びに逃げ歸り兩人共に死に臨む迄竹の山の下に到らず子々孫々にいたる迄誡せし事あり又いにし年の事なり竹の山緣日九月廿八日には山川鄕の麓より村町の者ども皆參詣する夥し然るにその道岩石侍りて老弱は攀登るに惱み適平夷なる處は荊棘足を傷しめ衣に羈る是に依て竹の山道作りせんとておのおの申合せしうち兒ヶ水の者共は舟路より來るを徑とすれば浦の村長を始め一艘の小船に取乘り漕ぎ出でたるに俄に北風强く吹出し船は南の靑海原に流れ出で櫓櫂も水竿も用ひがたきを竹の山の巔に鳶一羽止まり居るかと見へしが其鳥忽ちに五六尺の白鳥と化し飛行する事矢よりも迅く見る

山川兒ケ水の者共の山の社既を修理せんと船を出せしが俄の大風波はげしく船覆らんとせるを何者とか来りてその船を山川松山の境より川のわたを

痘瘡を聖武天皇の時外國より傳授まうさる人間の一大厄なり比病流行時を猛勢なりんとを祝しく民間に踊を為まを疱瘡踊と
いふ流行を惜むの
へうしに拍子歌を記さも
山川郷竹の山疱瘡踊の発端の男を作り新義岩と云

新發智

がうちに今迄南の海原行へしら浪に流れ出されて命なからむとする我船を山川麓の菅山浪打つ涯より十間斗り松山の本に引上げたり船中の者共夢うつゝ辨へかねつ却て空おそろしく麓に走りゆきて云々のよし人々に告げたれば邑人あやしみ聞傳へ〳〵其松山の本に群集して陸地に船を盪上し事の奇異なるを嘆駭して後に其船を再びあらためて海に浮べしに又針さす程の傷つきもなかりしとかや凡そ竹の山の奇談は即ち山川の里に住める愛甲新平といへる者のかいつけておこせしなりこの新平竹の山を信仰し常に其の叢祠を再興し南島に往來する海船の庇麻を禱らんとしてその願を果さずといへりされば竹の山に係れる靈驗の事ども數十條を記したれど今はその煩を厭ひて漏しぬこのもの曾て肥前松浦の江島板部の兩島の際にて鯨取の本手をなしたる事あれば鯨を捕るの術を委しく知りぬ凡そ鯨は小寒十日前と春彼岸十日前とに西の海原より東海に向ひ來るその魚道は必ず本藩甑島の左右を通ることなればこゝにおいて鯨網を張りてんにはその幸を獲べき始末を語りぬこの者四方の地に遊びて聊名山の僻あり頗る辭氣ありてうきたる事はいはぬをのこなれば其說を取り用ひて他日鯨を捕ふるの一巻を著すべし

幽靈還書

明には神に顯はれ陰には鬼となる鬼を俗に幽靈と稱す多く寃魂の結ぶ處其元氣未だ消散せざれば彷彿として人間に出づ古今の鬼談歷々たり然れども一度消滅したるもの再び形狀を見す其理本より有る事を得ず多くは狐狸の人に憑耳曾て人魂と呼ぶ者あり其形酒瓶に似て尾を引き遊行して或は

樹上に懸り止りて去る事を得ず俗に人の遊魂なり是を撲消せば其人魂を褫れて氣脫となるなど云是外國に所謂飛頭老子と相似たり（續博物志云、嶺南溪洞中、往々有飛頭者、故有飛頭蠻、又星槎勝覽云、占城國下尸頭蠻者、是婦人、但無頸、夜深飛頭而去、飛回復合其體、即活如舊、若知而封固其頭、或移體別處、則死矣、人有病者、臨糞時遭之、妖氣入腸必死矣、と）按ずるに此物は是夏秋の交に出て春冬の候に少し蓋し天日の火氣水泥の中に照徹し水氣に包まれ漚泡の樣になり夜に入りて火氣上昇の氣に乘じ空中に飛行すると見えたりいにし年芝西向邸の合壁鈴木屋が塀の溝より此もの飛び出でしことを見て天氣の火氣水中に入りてかく形をなすにやと申たる事あり又夢の說も空を摑むに似て有れども亡がごとく人富士山を見ざる者終に富士の夢なしといへばとかく思夢と申が如くに目を塞ぎて心にて觀る處なるべし周禮など に占夢官あれど一々に當るにあらず今にては戲に似たり故に愚人の前に夢を說かずと申すにやされどたま〳〵夢の當る事また少からず一々に語り記さんは日もたらざるべし佐土原假屋守丸田某その友だち海老原何某より聖學問答を又々借りして置きたるに海老原痨咳の疾ひを患ひて終たり丸田一夜机に倚りて書をよみつゝ思はず目睡みたるに其間一二間と見えし所に果てにし友達海老原いと羸憊たるに白袗を着杖にすがりて吾婆婆の因緣盡きて今は黃泉の客となり青年の志を齎らして幽明を隔つるこそ悲しけれ去にし頃聖學問答の書を汝に貸しつる彼は調所新八といへる人の書なりし程に我かく告げたりと辭して新八へ返し吳よかしと甚懇にいふかと思へば夢覺めたり打ち見るに机前の燈幽かなる蔭に物ありて煙消ゆるが如し丸田奇異の思ひをなしながら調所新八といへるは名をだに聞き知らぬ男なれば忘れぬ

丸田氏の寢所より亡友
海老原氏の魂魄来りて
昔を語る

中にと筆とりてほうこの片はしに此四字を書留めてまた睡に就てつとめての朝に友だちに行きてゆふべは云々の夢を結びたり調所新八といへる人やあると問ひけるに友だちも其名を知らず後に數多の人に物語りしたるに其者は正しくいつ地に住める人なる事を聞得たれば人して調所にあるしは故人海老原に云々の書を貸し給へる事は有りや無きやと問ふに中々に我書なりけり某の年海老原に貸しつるが久しく返さざる故に彼病中に書して返せよかしと問ひける事候なりと答へける尋れたる男兩手を拍ちて丸田が夢の事を有りのまゝに咄したれば新八不思議の事哉さばかり我は亡友海老原に詰りも責めざるを病中にさこそ念にかけたるらめ死して猶其一念を丸田氏へ通じぬらんこそ痛はしけれかく迄も思ひ居たらば何にし海老原に與ふといひ越さゞりけん

悔しさよされど是その一念を通ずべき爲なれば吾に返し給はれとて請取りぬ後に其書を見たるに正敷調所が藏印を書尾に捺(オ)てなんありけるとぞ又海老原某は父母共に早く身死(マカ)りて繼母の老いたるを養ひしが繼母また終(ミマカ)りたり既に葬りし夜より某が枕もとに繼母來りて我生前に歿後の菩提を修ぜんと一の念珠を櫛笥の中に納れ置きたるに今はの時言ひも遺さず今に心に懸りて安からず取りて我に得させよと同じ事を三夜つゞいて夢見たれば某も夢ならぬ誠にやと不審して繼母の櫛笥を探り見れば果して一串の念珠を獲たり因て是れを繼母の魂屋の内に懸けたるに其夜よりして夢見る事は止みたりき此二事は近頃親しく人の聞き識る所なればうき說にあらずむかし周の文王將に狩せんとす有司卜して曰く所獲非熊非羆と奏しけるが文王出て果して太公望を渭

鬼の話を聞ふ伺るをの〻〻昔
有川吏與の妻よおくれて三位
公の宮に仕へて兵部の局とゝ
ひ〻始め男死り一周忌に値りて時
夫の夢に入りてよめる

なきあのかゝ
あれふ〻ゝ
ぬき〻〻〻〻
ゝきゝゝ

むこうゝゝ
をふきゝゝ

海老原某の継母殊数
を求めに来る

列仙傳云、唐雲房先生、諭呂洞賓曰、子適来夢、升沈萬態、榮悴千端、五十年間一瞬耳、得不足喜、喪何足悲哉、世有大覺、而知人世一大夢也、洞賓感悟、遂求度世術云、

珠數を擲筊の中より獲たり

濱に獲たるを後人曰太公望は西伯の間人なり渠をして殷の紂王に美女佞人を進めて彌其暴惡を長ぜしめ終に占夢に託して太公を卑賤より引上げ軍師となして武王發に至り殷紂王を弑して周室を興せりと孫子注及び星宿夜話に書し後醍醐天皇は兼て楠正成の武畧に長じ勤王の志を懷けるを聞こし召し南に指せる櫟樟の樹蔭の夢に託し藤の藤房をして正成を徵されしと太平記綱目などに擧げたれどかく事毎にのみ假託なるにあらずかの神武帝高倉下の御夢商の高宗良弼を賚ふを夢見たるなどの如き皆至精の感ずる所なり況や堂々の軍を興し天下を恢復し玉はんに始めより民を愚にするの謀計を用ひられんやは崇德帝數々重祚を夢みて遂に保元の反亂を引出されしが如きは愚にあらざれば惑といひつべし西土にて夢を占ひて獄を斷ちしなど多し晉載記本傳云、前秦符融字、傳林、爲司隸校尉、善斷獄、京兆董豐、遊學三年而歸、宿妻家、是夜妻爲人所殺、妻兄訴豐殺之、不勝楚掠、遂自誣服、融疑而問曰、汝行往還頗有怪異、及卜筮否、豐言嘗夢乘馬入一水、自北而南、俯見兩日在水中、又馬左向而濕、寤而心悸、筮者云、憂獄訟、遠三枕、避三沐、既至妻爲具沐、夜授豐枕、憶筮者言、而皆拒之、妻乃自沐、以其枕眠、融曰在易、坎爲水、爲北、離爲馬、爲南、馬北渡、從北而南、從坎之離、三爻同變、離爲中女、坎爲中男、馬左向而濕、水也、左水右馬、馮字、兩日、昌字、其馮昌殺之乎、推驗獲昌、詰之具服、與豐妻奸、故謀殺豐、誤中婦人、とあり是は源平盛衰記に文覺始め遠藤盛遠といひし姨の娘あとまといへる女の源左衞門尉渡に嫁して三年になる十七才の時文覺に懸想せられその意に背きなば母の命をとりなんと搆へしほどにあとま文覺に詐り吾が夫は髮を洗ひて高殿に伏せなん髮を披りて殺し給へと謀り渡は帳

董豐の妻誤て奸夫に殺さる

秦の符融董豐が獄を斷ず

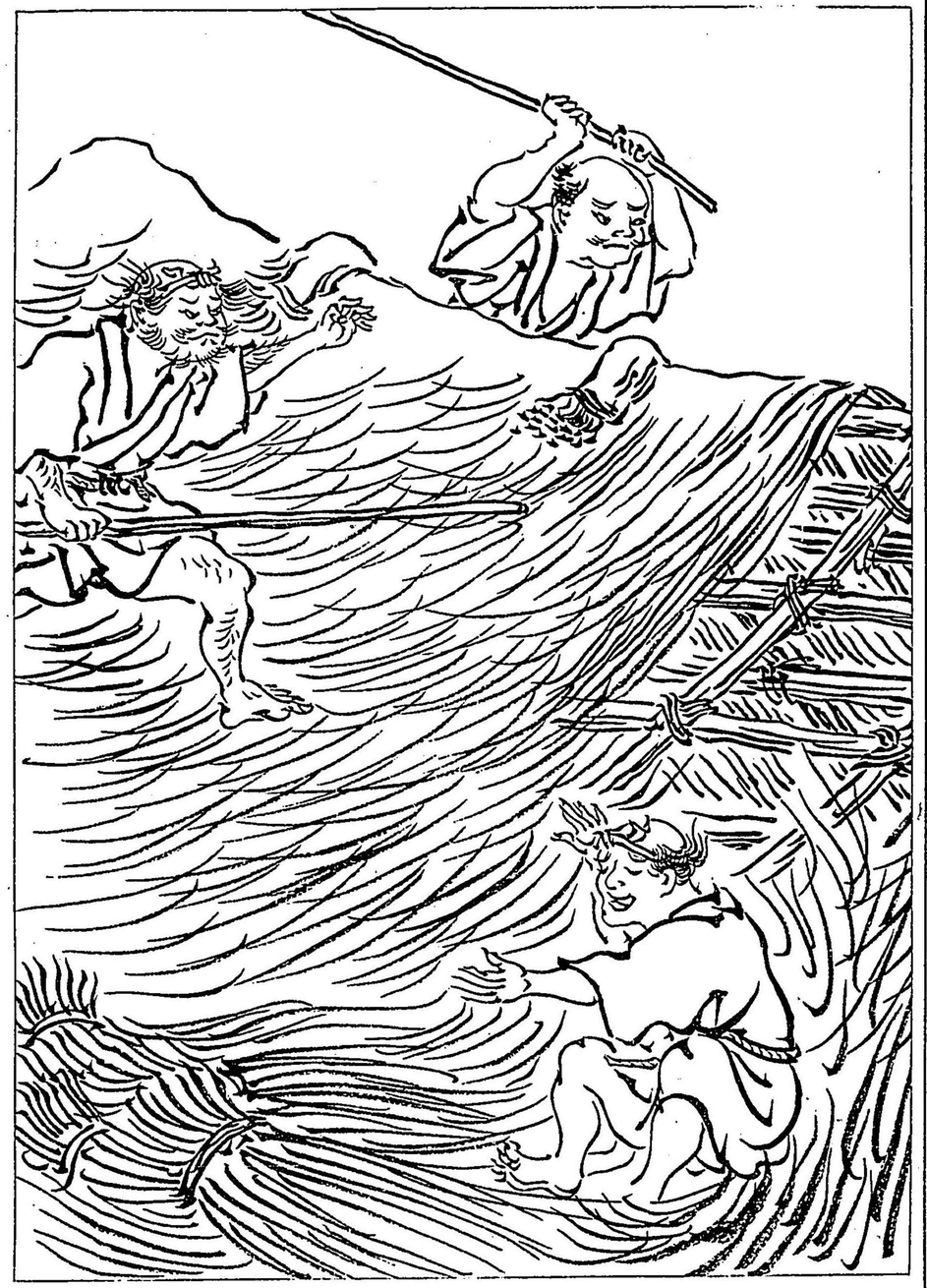
臺の奥にかき臥てあとまは我身の髪を濡らし髻に取りて烏帽子を枕に置き帳臺の端に臥したるを文覺夜半計りにねらひ寄りぬれたる髪をさぐり合て唯一刀にあとまを斬りしとあるに似たる話なり然れども豊が妻は既に馮昌に奸通せしとあれば其節操は雲泥萬里の差あり抑浮世は夢のごとし歡を爲すこと幾ぞや古人燭をとりて夜遊ぶと李白桃李園の記に書したりしぞいと哀なるべし少去り老來りては誰かは一人世に遺り止まるべき況や脩短おの〳〵命ありてひとしからず青年にして世を辭しなんは就中夢の世の中とや申べき竹窻隨筆云、處世若大夢、又觀世間、猶如夢中事、其云若云如者、不得止、而喩言之也、窮極而言、則皆眞夢也、非喩也、人生自少而壯、自壯而老、自老而死、俄而入一胞胎也、俄而出一胞胎也、俄而又入、又出之無窮已也、而生不知來、死不知去、蒙々然冥々然、千生萬劫、而不自知也、古詩云、枕上片時春夢中、行盡江南數千里、今被利名牽、往返於萬里者、豈必枕上爲然也、故知莊生夢胡蝶、其未夢胡蝶時、亦夢也、夫子夢周公、未夢周公時、亦夢也、曠大刼來、無一時一刹、而不在夢中也、破盡無明、朗然大覺、曰、天上天下、唯我獨尊、夫是之謂、夢醒漢と見えたり然れば夢の說を解く亦猶夢の如し夢の事豈こゝに止まらんや

大蜘蛛並大蛞蝓

蜘蛛種類多し昔し鎭守府將軍多田の滿仲の斬り玉ひしは螪蟷なり（一說には源頼光とあり）其刀を蜘蛛切丸と名付けられ後は熱田社に納めたりと見えぬ然れども神武紀景行紀に載せられし土蜘蛛とあるは皆人にして窠に棲み穴に居しものゝ泛稱なること諸國の風土記に多く見えたれば滿仲の斬り給へるも山賊の輩にてやありけん今の世に海道に往來して馬を牽き轎

を舁きて風を命に世を渉る逃亡無籍のものを蜘蛛助といふもふるき遺稱なるべし又雲助の意といふも雲は風に順うて生散跡なし蛛も風に隨ひ網を作る者なり歌にも風をいのちにおごくかなと詠みしもこれなり今人家に八手蛛といふを方言に賊蛛といふは多く人の忌嫌ふものにて此方を見つけては毎も賊かと詈るなり自然と此名出でたりとぞ其雄も身は細く手長く色白く斑の點あり雌は身太く色黑し雌雄共に眼の光り黃く金の如し唐人の句に壁蟲如懷金橘網鑑とありよつて案に本艸に壁錢大如蜘蛛而形扁斑色八足而長とあれば八手蛛は壁錢の種類なり先年福昌寺庫裡の茅屋を修葺せし時屋の棟より八手蛛出でたり軀の圍一尺計り手の長サ二尺有餘諸人是を見て未曾有の巨蛛といへり是より先屋根の上より嗷きられたる鼠の頭時々落ちぬ猫のわざとのみ思ひしに此大蛛を見つけし時も鼠を咬へて半ばを殘し居たりとぞやつこが隣り柏原某が宅の簷に夏の日蛛の絲より蝙蝠の垂れることあり打落し見たれば身の肉は食れてなしその檐の中に大なる八手蛛の入りて捕へ食ひたるにてぞありける凡そ此蛛を怕るゝ人は蛇蝎に勝れり實に氣うときものにてぞありける南朝紀傳に應永十五年戊子二月六日足利將軍道義の亭蜘蛛夥敷合戰せしことを載せたり此闘をなすは篠蜘蛛にて方言の山蛛なり其網を布に絲を右に繞すものなり歌の篠蟹とは蛛の枕辭にして多く竹の葉の間に網を張りぬ蛛の人を嚙めば毒ある事典籍に見えたり尤馬を害ふ因て此ものの出でゝより馬に竹の葉を飼はず又蛛には燈油を濟げば足爛れて落るものなり酉陽雜俎云、唐元和中、蘇湛遊蓬鵲山、褒糧鑽火、境無遺址、忽謂妻曰、我行山中、覩倒崖有光鏡、必靈鏡也明日將

大八手蜘蛛

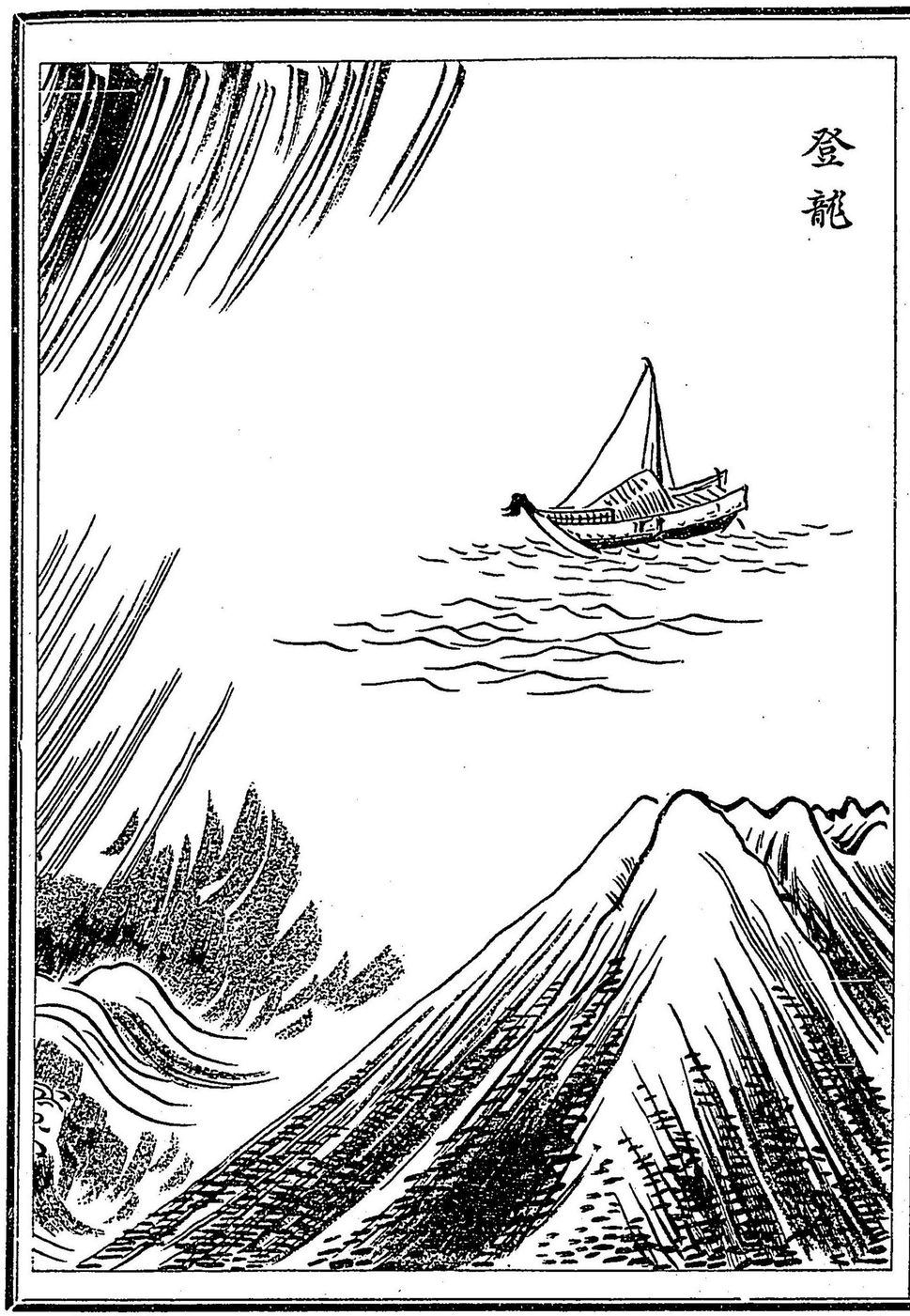


大蛞蝓

投之今與卿訣妻子號泣止之不得及明遂行妻子領奴婢潛隨之、入山數十里遙望巖有白光圓明徑丈蘇遂逼之纔及其光長叫一聲妻兒遽前救之身如甕矣有蜘蛛黑色大如鉆錛走集巖下奴以利刃決其網方斷蘇已腦陷而死妻乃積薪燒其崖臭滿一山中此外五雜俎瑯琊代醉篇などに大蜘蛛の事を載せて身の徑り一丈六尺などあれば福昌寺の八手蛛もその類なるべし又日向の小林中に大蛞蝓の居しことは圖の如し五月雨の頃には極めて大なる蛞蝓出づるものなり凡そ大蛞蝓を陰乾にし戰場の刀槍その餘の目釘竹に被用ひて之を濕せば敢て脫折ざるものとあり

登龍異說並鼈龍怪物

龍昇といふ事海陸共にあれども本藩にては多くは益救島より以南の海見津の門の邊又甑島などの洋中には龍登ることと珍しからず一所に六七箇所上ることもありとぞ其狀晴天俄にかき曇り暴風一陣の雨を帶びて其四方忽闇夜となり須臾にして海面渤起し白浪沸騰ること十丈計り泉の盛り上るが如く又空中より黑雲垂れてその起浪と相接して柱を立たるに似たり其中に物ありて登上るが如し而して後氷水の樣なるものすた〳〵と落ちて頓て元の晴霽になること何方にて見るも相同じ陸より龍昇りしは曾於郡鄕龍超大乘院前の椿木川のこと口碑に傳ふ近き頃は享和二年戌六月二日櫻島の前上瀨に龍昇りし事あり前にいふがごとく親しく見る處この以前に登りし時は雲と波眞直に立ち戌年上りしには繪に書しが如く雲の景色一回旋環せしといへり又益救島の海にて此もの登るには群犬皆龍吠をなす因て狗の長鳴するを龍吠と呼ぶといへり又龍をタツといふも海中などより空中に


登龍

雲浪を起して立つもの故に名づくとありさらば昔より有り來る事と見えたり明謝肇淛五雜俎云、杜少陵文、九天之雲下垂、四海之水皆立、東坡詩、天外黑風吹海立、余從祖司農公恭、以大行奉使過海、中流有龍見焉、倒垂雲際、直與相接、人見之歷々可辨也、殆信水立之語非妄、と見えたり是櫻島の海より登りし龍の形狀に露違はず唯此間の人は雲垂れ波立つを龍の登るぞといへど降れる龍もかくの如しと見えたり又龍に大小あることは程子の書けるに龍を串さしにして炙りたりとも見え五雜俎に土壁の中に蟠龍の痕鮮に存りけるなど見えたり龍は能細能巨能短能長など見えたれば變化窮りなきものなり又高野山にては吹笛を禁ずむかし大龍あり此山に住みけるゆゑに今に之を犯せば山中震動すといふ龍の吟ずる聲笛のやうに鹽らしき聲なるべくや覺束なし本藩益救島甑島の海中に龍昇といふは恒なれど龍の吟ずる聲を聞きたりといふもの一人もなければ信じがたくこそ或曰龍は本形なし地中の陽氣積鬱して陰氣と和せず地外の陽氣に引動かされて發して天に登る氣なり因て龍昇る時雲の端に伸縮の貌旂などのやうに動くものは陽氣伸びんと欲して振ふなり既に暢て消散する時は引上せし水氣すた〳〵となりて海中に歸り落つるといふ是を釋氏が寂滅の空にかなふといへども老子は虛無を以て有を養ふの教ゆゑその發陽して退藏の德を失ふを惜みてかの龍の如しと譬ふるは時あつて現はすと云ふにあらず上に昇るべきもの地下に潛伏していつまでも密藏して發せざるか有を養ふの道とす儒者は又空有の二に着せず物に滯ふる時は釋氏の空を以て消し動き易き時は老子の虛無を以て息む本艸の說に龍は燕の血を嗜み苦楝を畏ると云は

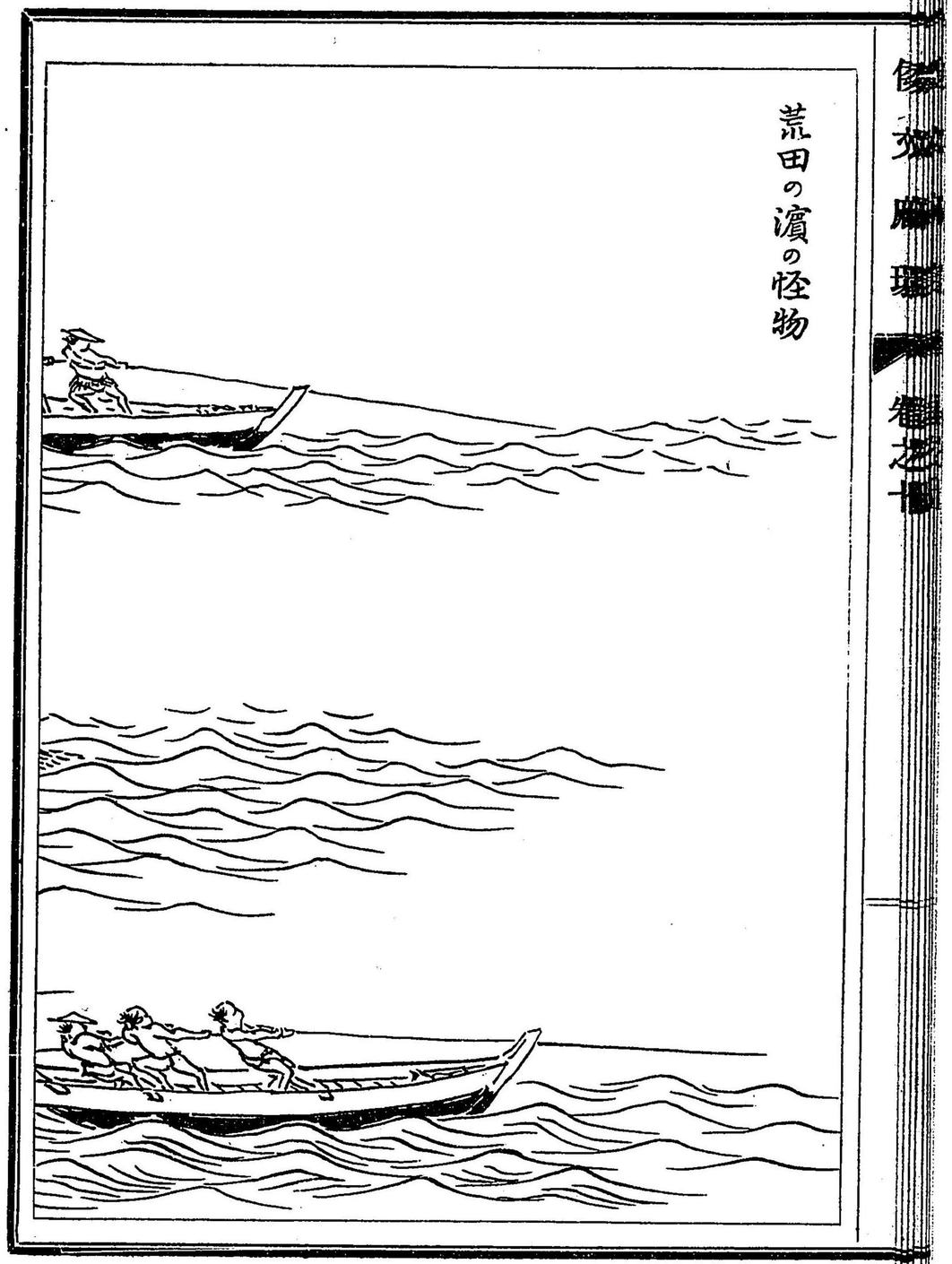
鼉龍

是鼉龍蛟蜃の類なるべし鼉龍は先年甑島の沖にても獲て近頃大島にては島人ども打殺して食ひたる事あり眞龍には非ず又易に乾の象とてそれに似氣なき坤の馬に配せしは眞龍を知らざる時のちはなるべしといへり易の龍といふ者實は譬へものと見えたり按後紀弘仁十年秋七月丙申京中白龍見有暴風雨損民屋とあり龍の陸地より上りしなるべし先年上總おんじやの池より龍登りし事は上總の人より聞きたり。

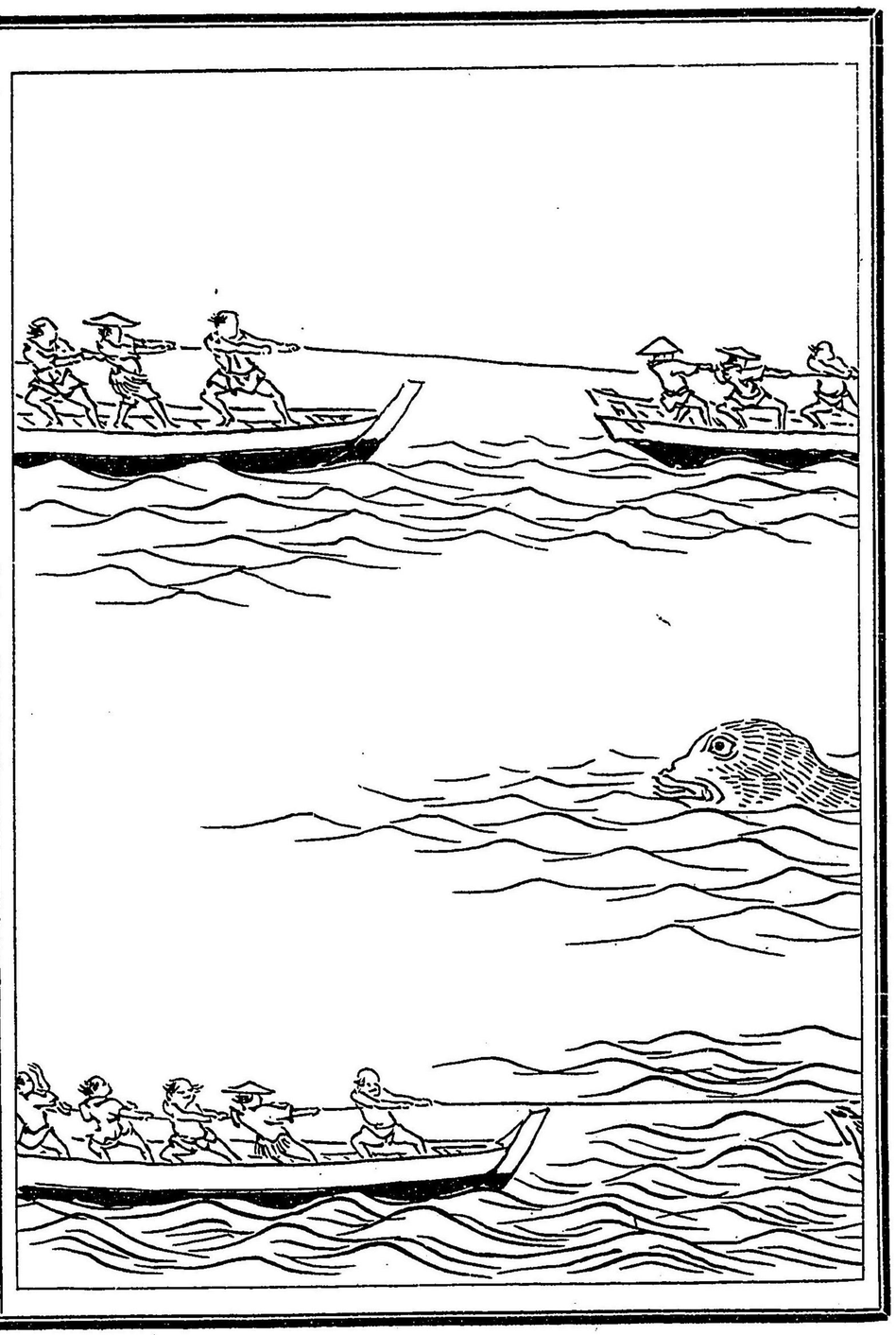
附錄

鼉龍を大島住好間切洲垂村にて取りしは寛政十二年庚申二月の事なり此住好に一里廻りの入海あり大海より潮さし入る其入口僅に三間計りこの鼉龍いつの頃よりこの内海に入れるにや時々水上に浮み出て陸にも上りぬこの時も陸に上りて晝寢しをるを住好村の者共馬の綱を以て搦めたれども人に立向ひ懸り働く體の甚だ畏しかりければ多人數寄り屯ひ漸く斧などにて切殺したりその内或老人我は世にながらへて詮なし試に龍の肉を喫んとてたゝか喰ひしに味ひ甘く魚に勝りたり村中の者ども盡く集り食ひ盡しけりこの鼉龍面の長サ三尺口の濶さ二尺二寸色は灰黑にて腹は黃し惣身鱗あり尾さき尖り前の手は四指蹼あり後の足は五指人の手の如し惣身の長さ二丈餘り其廻り五尺に餘れり惜いかな之を本府に致し東都に送りて看物にせざりし事を

鹿兒島荒田濱の怪物はことし文化十年酉六月九日晝八ッ時荒田田毛川の川末に出でたりこの物頭の大サ獒犬より太く眼の廻り六七寸眼光すさまじく人を射る髮毛の色薄黑く耳はなしこの川末海の深さ三四尋にしてこの物頭を出だす事海より一尺計り初め出でたる迄は惣人數見ず再び出でたる時

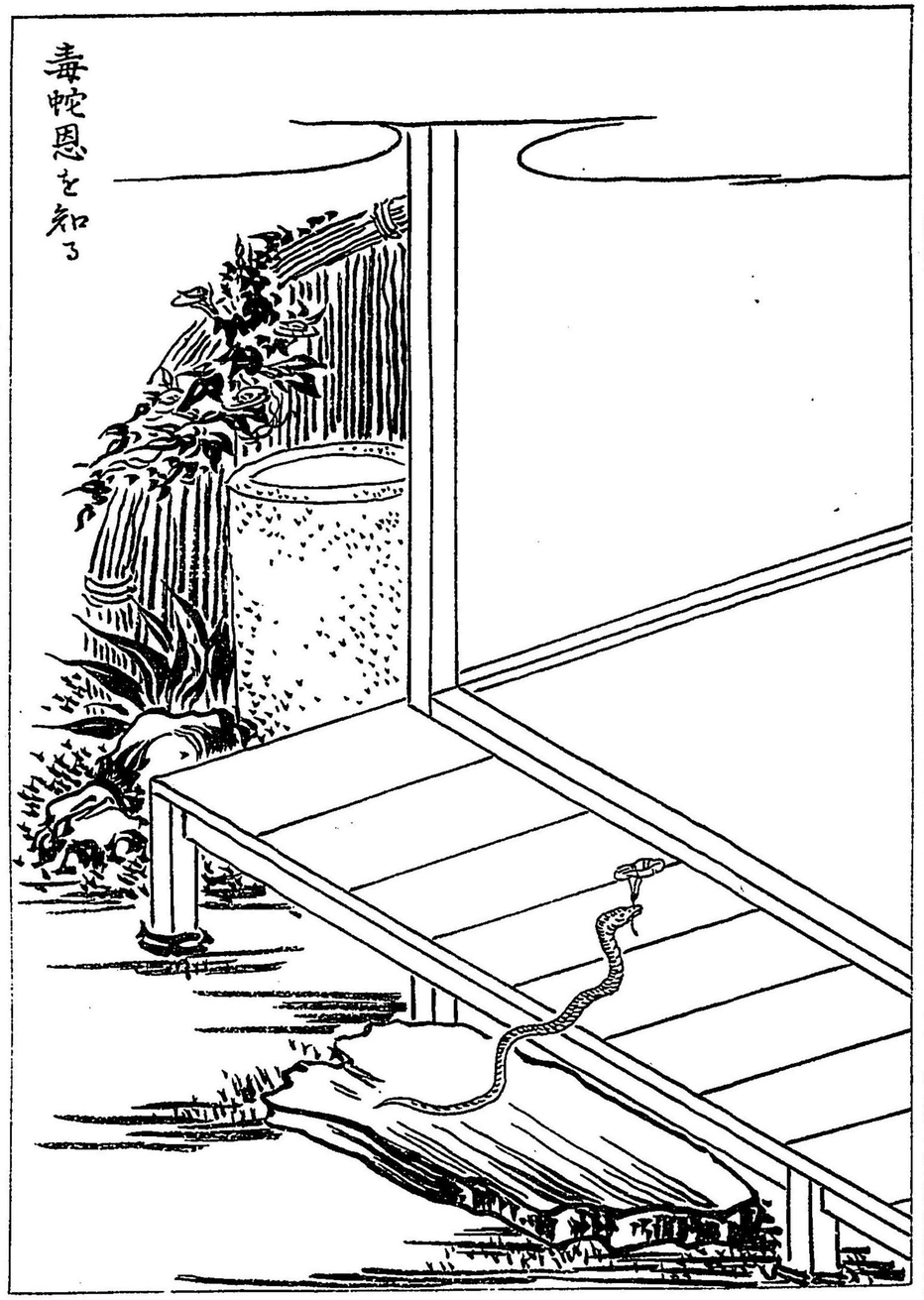


荒田の濱の怪物



は凡そ煙草二吹計りの間現はれ居たる故人悉く見留めたり舟中皆大に驚き恐れ手足抔海に付かず引網をも打捨て逃歸る漁夫等謂らく人魚なるべし但全體を見ざれば究めがたし目大きく耳なければ海獺ともみえず又頭髪あれば龜鼈の屬ともいひがたし一説に此もの身の長さ一丈餘にして鱗なく毛を生じ又手ありしと云是を郡見廻永田某に問ふにその日荒田濱にて親しく見しものに糺し聞き且鎌田與助てふ者の圖にかきしを示すをもてその眞説を取用ひ書し侍りぬ一説は覺束なしこの怪物をも打殺しなむにはよき看物ならんと口惜しき事に侍り

毒蛇知恩

鼠屋彦兵衛といへるもの本府に來り股引足袋製らゆるを業とす彦兵衛始め江戸に在りし時某子某花街に遊び忘八の行跡ありしかば父彦兵衛勘當しぬ其子十餘年を經て後おのが無狀を悔改めて再び家に歸ることを得たりさてかく數十年の間諸國を流浪せしかばいかさま奇かなる見聞なんどありつらんと問ふ者あり其子いひけらく嘗て加賀國に飄泊して饑寒に苦むこと甚し時に里人の何となく噂するを聞くに某の寺の住持は極めて慈悲深く一寸の虫螻といへども敢て生類を殺さず況や人をやといふ某是を聞きて心に喜びその寺に尋ね行き僕は生國江戸の者にて候ひしが若氣の血まよひにて遊蕩に財を費し行て歸る事を忘れ候ひしによつて父なる者の勘當を受けて此所に吟ひ來り寺奴とも商僕ともなりて口糊を致度候得共一所にのみ在り着かず剩へけふは朝の烟をだにたつべき世計を失ひ今朝より火食を絶ち候へば目も眩み足も引かれず候誠に情欲は人性を伐るの斧鉞とは只

毒蛇恩を知る